

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

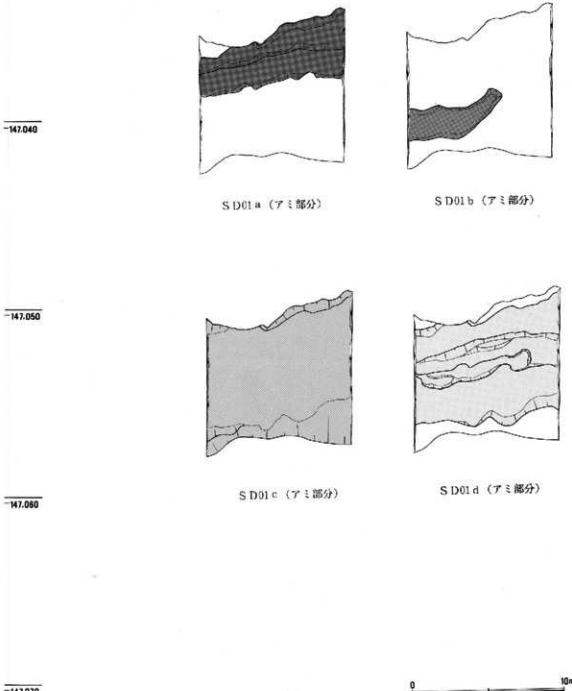
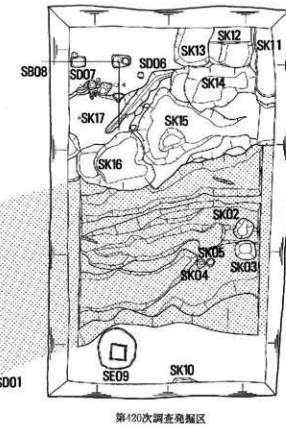
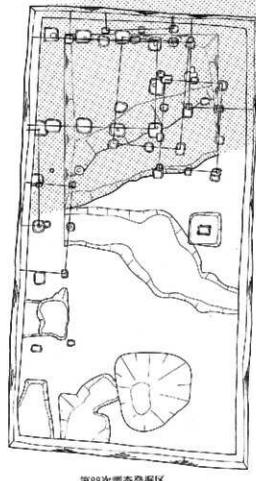
平成10年度

1999年

奈良市教育委員会

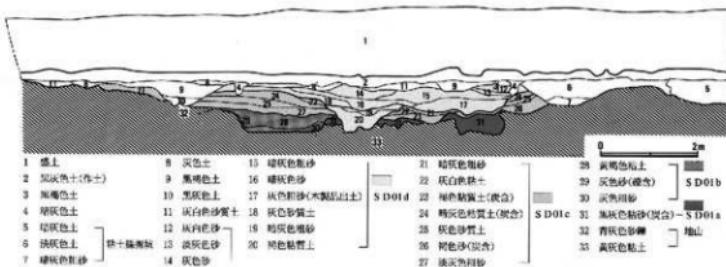
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成10年度』正誤表

ページ	行・位置	誤	正
例文	12行目	技術史員 立石志志	技術史員 三好美徳 立石志志
発掘調査 一覧表	(調査次数) 417 418 419 420 421 422の各行	(調査期間の年) H10	(調査期間の年) H11
発掘調査 一覧表	6AT122	(調査地) 東九条町443-1, 493-9 (事業者) 宮田充規	(調査地) 東九条町443-1, 439-9 (事業者) 宮田充規
10	7行目	類	類
12	遺構平面図	(追加・下から2本目の東西ラインの座標)	X=-146, 310
12	遺構平面図	(追加・右から1本目の南北ラインの座標)	Y=-18, 570
12	遺構平面図	(追加・左から1本目の南北ラインの座標)	Y=-18, 580
15	4. 調査地	奈良市柏木町459番地	奈良市柏木町459番地他
37	15行目	この例の他は確実に	この例の他は同坊内で確実に
56	第2発掘区北壁土層 図	(追加)	1疊土・2黒灰色粘質土(作土) 3暗灰色粘砂(堆埋土) 4暗灰色砂 5灰色砂(堆埋土) 6灰色土(堆埋土) 7黄褐色粘土(堆埋土) 8淡灰色土 9黄褐色粘砂 10灰色砂(堆埋土) 11灰色砂(遺物多く含む・SD03埋土) 12茶褐色中粒砂(SD03埋土) 13暗灰色粘砂(SD03埋土) 14淡茶色細砂(SD03埋土) 15灰色砂(地山) 16暗黃灰色粘土(地山) 17風灰白色粉土(地山)
63	21行目	瓦器小皿	瓦器小盤
64	註3	『飛鳥・麻原官署調査報告9』	『飛鳥・麻原官署調査報告9』
64	註3	『飛鳥・麻原官署調査報告10』	『飛鳥・麻原官署調査報告10』
71~72	タイトル	(追加)	溝SD01時刻別遺物拾出回数(1/250)
75	土器の図4-10-11 の下	(追加)	流路SD01(4~11は1/4) 土坑SK04(1は1/4) 土坑SK02(2~3は1/4) 出土器 生土器
87	13行目	SD01	SD334
87	15行目	SD02	SD335
87	16行目	SF03	SF336
87	16行目	後述の	前述の
87	16行目	SD01-02	SD334-335
87	19行目	SE04	SE337
87	遺構平面図	SD01	SD334
87	遺構平面図	SD02	SD335
87	遺構平面図	SF03	SF336
87	遺構平面図	SE04	SE337
87	遺構平面図	SA05	SA338
87	遺構平面図	SA06	SA339
88	3行目	SA05-06	SA338-339
88	出土土器キャプション	横SD01	横SD334
89	1行目	05は	338は
89	1行目	06は	339は
89	6行目	黒色土器・塗土器	黒色土器・製塙土器
89	6行目	SD02	SD335
89	11行目	SD01-02	SD334-335
89	11行目	SF03	SF336
89	12行目	SD01	SD334
89	13行目	SD02	SD335
89	14行目	SF03	SF336
89	18行目	SD01-02	SD334-335
89	19行目	SD01-02	SD334-335
89	19行目	SF03	SF336
89	概念圖	西から1/3	東から1/3
95	調査一覧・第79次	H.10.04.18	H.10.04.13
95	調査一覧・第79次	70m <sup>2</sup>	40m <sup>2</sup>
121	6行目	基壇4ヶ	基壇Dの
121	11行目	丁寧ね	丁寧な
123	5行目	中世	近世
138	西壁土層図	E	S
138	西壁土層図	W	N
145	18行目	普掘川	普掘山川
147	16行目	「普掘山	「普掘山



第88次・第420次調査発掘平面図 (1/200)

147.050 147.048 147.040 N  
S 18.875m



尧脑区西坡土壤图 (1/100)



## JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業地内の発掘調査位置図 (1/6,000)



井戸S E14出土 鋳造関連遺物



井戸S E14出土 鋳放し銭及び鋳型

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成10年度

1999年

奈良市教育委員会

## はじめに

昨年の12月5日に、「古都奈良の文化財」が、「世界遺産一覧表」へ正式に記載され、世界的に類を見ない文化財「世界遺産」として認められました。このことは、わたしたちの先人達が長い年月を通じて保存の取り組みを行ってきた結果が世界から認められたものともいえましょう。

特に、今回初めて、地下にしか当時の姿をとどめていない「平城宮跡」が「世界遺産一覧表」に記載されたことは、画期的なことであります。平城京をはじめとする埋蔵文化財の発掘調査・保存整備を進めてきた奈良市教育委員会としては、感慨ひとしおのものがあります。それと同時に、これからも重要な奈良の埋蔵文化財の保存を一層積極的に進めていきながら、新しいまちづくりとの調和を図っていきたいと思っております。

その一環として、本年の5月には「菅原はにわ窯公園」を開園することができました。この公園は古墳時代後半の菅原東遺跡埴輪窯跡群を保存するために整備した公園で、市民の憩いの場として活用されています。

さらに、発掘調査・保存の活動拠点である埋蔵文化財調査センターは本年10月に裝いも新たにオープンいたしました。新しいセンターには展示室や講座室も備え、より開かれた存在として、埋蔵文化財の普及啓発活動を今まで以上に進めて行きたいとおもっております。

本書は、主に平成10年度に行った埋蔵文化財発掘調査成果の概要をまとめたものです。多くの方々に御活用頂き、奈良市の埋蔵文化財の調査成果を知っていただければ幸いです。

最後になりましたが、このたびの概要報告書の刊行にあたって御指導、御協力を頂きました関係機関の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成11年12月

奈良市教育委員会  
教育長 河合利一

## 例　　言

1 本書は、平成10年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査についての概要報告を収録したものである。なお、平成8年度に調査を実施して、未報告であった正暦寺旧境内第1次調査、平成9年度に調査を実施して未報告であった平城京第386次調査、史跡大安寺旧境内第77次調査、正暦寺旧境内第2次調査についてもあわせて報告する。

また西隆寺跡の発掘調査は、これまで継続して奈良国立文化財研究所に調査指導を依頼しており、次年度以降に報告する計画である。

2 平成10年度の発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部 文化財課	課長	西村廣彦	主幹	森川倫秀
埋蔵文化財調査センター	所長	高谷明男		
庶務係	係長	杉村武史	事務吏員	山形和広
調査第一係	係長	西崎卓哉		
技術吏員	立石堅志	鐘方正樹	松浦五輪美	
	安井宣也	久保邦江	宮崎正裕	大窪淳司
	原田香織	細川富貴子		
調査第二係	係長	篠原豊一		
技術吏員	森下浩行	秋山成人	武田和哉	中島和彦
	池田裕英	久保清了	山前智敬	原田憲二郎

3 平成10年度の発掘調査や出土遺物整理作業等には、下記の方々の協力があった。

明崎康二	明松可奈子	荒川茂（故人）	今中勇	岩下和江	植田平信
植木武義	浦元由紀子	梅木繁一	大友明美	小川布子	奥田秀吉
角谷和美	金戸康子	北井育代	北尾史真	北村進	木村喜代之
木村嘉宏	高力美和	小西綾子	小西貢造	小林麻美	近藤富貴子
斎藤和子	佐伯全子	里中千秋夫	島軒満	塙野谷八十布	白坂明子
甚出真友子	角南聰一郎	芹川順子	芹野恒代	高橋敬輔	瀧田勘
多久裕三	田口奈美江	辻俊浩	辻中昊	辻寛子	辻本武雄
仲村繁夫	中島満寿江	二宮信隆	林健太郎	板東剛子	久富正登
福田米光	藤井妙子	藤沢辰雄	増田義郎	松田十三日	松村茂治
松山経子	松本威	宮澤靖幸	森本裕美	山村光子	吉川三子
吉住さと子	吉村章				

4 平成10年度の発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会など関係諸機関から御指導と御協力を頂いた。記して感謝致します。

- 5 奈良教育大学の西田史郎氏には、平城京第386・410次調査の採取試料の火山ガラス分析を行って頂いた。奈良市世界遺産登録推進室の中井公氏には、大安寺第80次調査で報告した凝灰岩切石の所在を御教示を頂いた。以上、記して感謝致します。
- 6 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの調査次数である。
- 7 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および、奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は調査ごとに付した仮番号である。
- 8 本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める四十方眼方位第IV座標系によっている。標高は海拔高である。
- 9 本書では、平城京内において古墳時代以前の遺構を検出した調査地について、その所在地の大字名に基づき、遺跡名を付した。ただし、単一の遺構であっても人字名にもとづき遺跡名を付したため、今後名称が変更される可能性がある。
- 10 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に執筆者を明らかにした。
- 11 本書の編集は、原田憲二郎が担当した。

## 本文目次

### I 平城京跡の調査

1 平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査	第386次 ······	1
2 平城京左京六条一坊十五坪の調査	第401次 ······	7
3 平城京左京四条四坊十一坪の調査	第402次 ······	8
4 平城京朱雀大路・下ッ道・尼辻東方遺跡の調査	第403次 ······	11
5 平城京左京三条一坊一坪の調査	第404次 ······	14
6 平城京左京六条一坊十六坪の調査	第405次 ······	15
7 平城京左京四条四坊三・六・十一坪の調査	第406・414次 ······	28
8 平城京左京五条五坊七坪の調査	第407次 ······	31
9 J R 余良駅周辺地区土地区画整理事業に係わる調査 ······		33
(1) 平城京左京四条四坊十六坪の調査	第408-1・4次 ······	34
(2) 平城京左京四条五坊五坪の調査	第408-2・3次 ······	38
10 平城京左京一条七坊六坪の調査	第409次 ······	42
11 平城京東四坊大路の調査	第410次 ······	43
12 平城京左京四条四坊二坪の調査	第411次 ······	45
13 平城京右京二条三坊七坪の調査	第412次 ······	48
14 平城京左京一条四坊十二坪の調査	第413次 ······	51
15 平城京左京八条一坊九・十坪の調査	第415次 ······	55
16 平城京左京二条三坊三坪の調査	第416次 ······	60
17 平城京左京八条二坊四坪の調査	第417次 ······	62
18 平城京左京八条一坊十五坪の調査	第418次 ······	65
19 平城京東二坊間路の調査	第419次 ······	67
20 平城京左京四条五坊四坪・三条遺跡の調査	第420次 ······	70
21 平城京右京一条二坊三坪・佐紀遺跡の調査	第421次 ······	78
22 平城京左京三条五坊三坪・油坂遺跡の調査	第422次 ······	81
23 平城京東市跡推定地の調査 ······		86
(1) 平城京東市跡推定地の調査	第22次 ······	87
(2) 平城京東市跡推定地の調査	第23次 ······	90

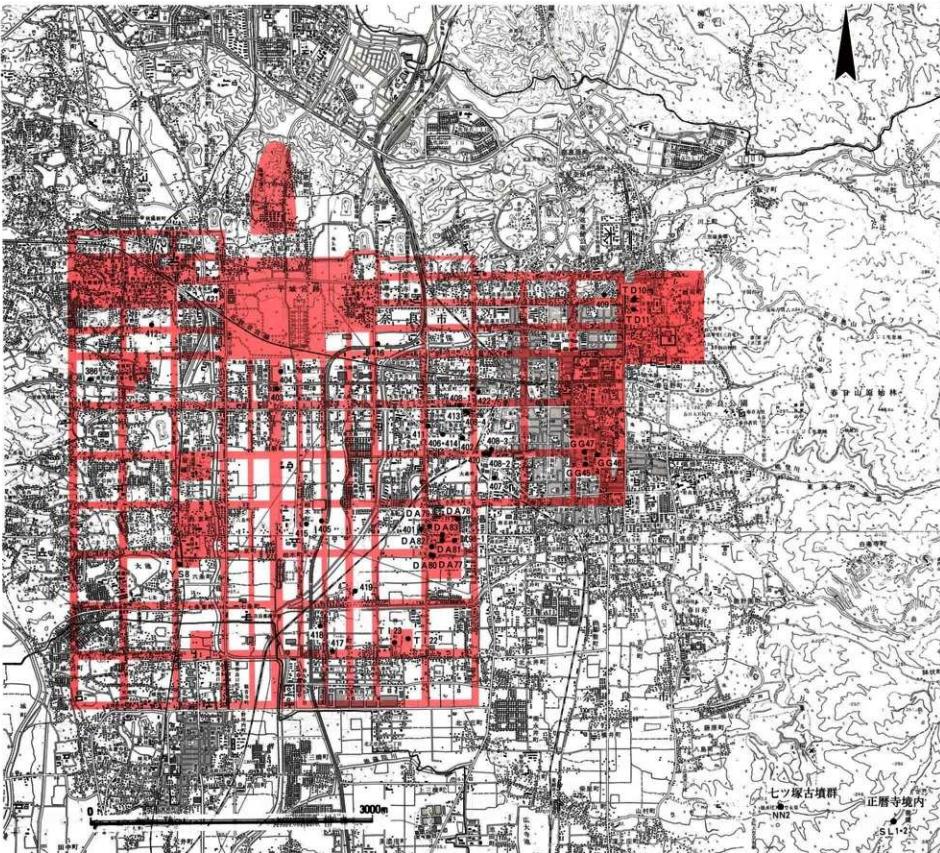
### II 平城京内寺院跡の調査

1 史跡大安寺旧境内の調査 ······		95
(1) 南大門・大安寺遺跡の調査	第77・80次 ······	96
(2) 贏院推定地北方地区的調査	第78次 ······	105
(3) 食堂并大衆院推定地の調査	第79次 ······	106
(4) 経棲の調査	第81次 ······	107
(5) 西面中房の調査	第82次 ······	113
(6) 北東太房の調査	第83次 ······	115

（7） 菩院推定地の調査	試掘98-1次	118
2 元興寺旧境内の調査		123
(1) 西回廊の調査	第45次	124
(2) 東塔院北方地区の調査	第46次	126
(3) 讲堂隣接地の調査	第47次	127
3 史跡東大寺旧境内の調査	第10次	132
4 史跡東大寺旧境内の調査	第11次	134
5 菩師寺旧境内の調査	第8次	137
III その他の調査		
1 正暦寺旧境内の調査	第1・2次	145
2 七ツ塚古墳群隣接地の調査	第2次	166
IV 小規模確認調査・試掘調査・工事立会		
1 小規模確認調査・試掘調査		167
2 工事立会		168

平成10年度 埋蔵文化財発掘調査一覧及び掲載調査

次数	調査名	調査地	調査期間	調査面積	事業者/事業内容	受理番号	担当名
40	平成10年六月二十日十五	大安寺二丁目8-1	H10.6.18~H10.6.25	40d <sup>2</sup>	八戸一夫/矢内氏園庭	H10.075	牧山
42	平成10年6月20日十一	三島町203-8	H10.6.20~H10.6.27	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.083	久保井・大庭
43	平成10年6月20日十二	二条町第三丁目4-1	H10.6.20~H10.6.27	90d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.084	武田
44	平成10年6月21日一	二条町第四丁目2-1	H10.6.21~H10.6.28	50d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.085	星方
45	平成10年6月21日十六	新町市場	H10.6.21~H10.6.28	220d <sup>2</sup>	八千代タケル/豊田市御園合意書交換	H10.086	奉下・山岸
46	平成10年6月22日十一・二	二条町水場内	H10.6.22~H10.6.29	13d <sup>2</sup>	豊田市役所/二条町水場内古河市御園合意書交換	H10.087	三井・長田
47	平成10年6月22日十二	西松町9-1	H10.6.22~H10.6.29	10d <sup>2</sup>	宇治山田市役所/古河市御園合意書交換	H10.088	松山
48	平成10年6月22日十三	三条町四丁目2-6	H10.6.22~H10.6.29	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/JTB古河市御園合意書交換	H10.089	久保井
49	平成10年6月23日二	三条町四丁目2-6	H10.6.23~H10.6.30	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/JTB古河市御園合意書交換	H10.090	久保井
50	平成10年6月23日三	三条町四丁目2-6	H10.6.23~H10.6.30	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/JTB古河市御園合意書交換	H10.091	久保井
51	平成10年6月24日五	二条町4-2	H10.6.24~H10.6.31	25d <sup>2</sup>	豊田市役所/JTB古河市御園合意書交換	H10.092	久保井
52	平成10年6月25日十六	二条町4-2	H10.6.25~H10.6.32	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/JTB古河市御園合意書交換	H10.093	久保井・史
53	平成10年6月26日十七	川上町87	H10.6.26~H10.6.33	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.094	安井
54	平成10年6月27日十八	大安寺二丁目2-1	H10.6.27~H10.6.34	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.095	大庭
55	平成10年6月28日一	下城前左近西町西端一	H10.6.28~H10.6.35	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.096	牧山
56	平成10年6月29日二	二条町4-2	H10.6.29~H10.6.36	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.097	久保井
57	平成10年6月29日三	青葉町1-2, 10-1	H10.6.29~H10.6.37	40d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.098	牧山
58	平成10年6月30日四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.099	小森
59	平成10年6月30日五	三条町四丁目2-6	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.100	松浦
60	平成10年6月30日六	松林町4-2	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.101	星方
61	平成10年6月30日七	三条町4-2	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.102	牧山
62	平成10年6月30日八	青葉町1-2, 10-1	H10.6.30~H10.6.37	40d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.103	久保井
63	平成10年6月30日九	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.104	小森
64	平成10年6月30日十	三条町四丁目2-6	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.105	松浦
65	平成10年6月30日十一	松林町4-2	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.106	星方
66	平成10年6月30日十二	松林町2-1	H10.6.30~H10.6.37	10d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.107	久保井
67	平成10年6月30日十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.108	安井
68	平成10年6月30日十四	春香町9-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.109	人妻
69	平成10年6月30日十五	八条町 丁B3-2	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.110	立井
70	平成10年6月30日十六	八条町 丁B3-2	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.111	大和・星方
71	平成10年6月30日十七	三条町4-2	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.112	久保井
72	平成10年6月30日十八	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.113	安井
73	平成10年6月30日十九	春香町9-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.114	人妻
74	平成10年6月30日二十	八条町 丁B3-2	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.115	立井
75	平成10年6月30日廿一	三条町4-2	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.116	大和・星方
76	平成10年6月30日廿二	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.117	久保井
77	平成10年6月30日廿三	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.118	牧山
78	平成10年6月30日廿四	大安寺二丁目8-1, 10-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.119	安井・正直
79	平成10年6月30日廿五	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.120	久保井
80	平成10年6月30日廿六	大安寺二丁目8-1, 10-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.121	大庭
81	平成10年6月30日廿七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.122	立井
82	平成10年6月30日廿八	大安寺二丁目8-1, 10-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.123	久保井
83	平成10年6月30日廿九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.124	人妻
84	平成10年6月30日三十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.125	立井
85	平成10年6月30日卅一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.126	久保井
86	平成10年6月30日卅二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.127	久保井
87	平成10年6月30日卅三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.128	人妻
88	平成10年6月30日卅四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.129	立井
89	平成10年6月30日卅五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.130	久保井
90	平成10年6月30日卅六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.131	立井
91	平成10年6月30日卅七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.132	久保井
92	平成10年6月30日卅八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.133	牧山
93	平成10年6月30日卅九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.134	立井
94	平成10年6月30日四十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.135	久保井
95	平成10年6月30日四十一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.136	人妻
96	平成10年6月30日四十二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.137	立井
97	平成10年6月30日四十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.138	久保井
98	平成10年6月30日四十四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.139	立井
99	平成10年6月30日四十五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.140	久保井
100	平成10年6月30日四十六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.141	立井
101	平成10年6月30日四十七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.142	久保井
102	平成10年6月30日四十八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.143	立井
103	平成10年6月30日四十九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.144	久保井
104	平成10年6月30日五十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.145	立井
105	平成10年6月30日五十一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.146	久保井
106	平成10年6月30日五十二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.147	立井
107	平成10年6月30日五十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.148	久保井
108	平成10年6月30日五十四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.149	立井
109	平成10年6月30日五十五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.150	久保井
110	平成10年6月30日五十六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.151	立井
111	平成10年6月30日五十七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.152	久保井
112	平成10年6月30日五十八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.153	立井
113	平成10年6月30日五十九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.154	久保井
114	平成10年6月30日六十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.155	立井
115	平成10年6月30日六十一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.156	久保井
116	平成10年6月30日六十二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.157	立井
117	平成10年6月30日六十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.158	久保井
118	平成10年6月30日六十四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.159	立井
119	平成10年6月30日六十五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.160	久保井
120	平成10年6月30日六十六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.161	立井
121	平成10年6月30日六十七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.162	久保井
122	平成10年6月30日六十八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.163	立井
123	平成10年6月30日六十九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.164	久保井
124	平成10年6月30日七十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.165	立井
125	平成10年6月30日七十一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.166	久保井
126	平成10年6月30日七十二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.167	立井
127	平成10年6月30日七十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.168	久保井
128	平成10年6月30日七十四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.169	立井
129	平成10年6月30日七十五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.170	久保井
130	平成10年6月30日七十六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.171	立井
131	平成10年6月30日七十七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.172	久保井
132	平成10年6月30日七十八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.173	立井
133	平成10年6月30日七十九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.174	久保井
134	平成10年6月30日八十	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.175	立井
135	平成10年6月30日八十一	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.176	久保井
136	平成10年6月30日八十二	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.177	立井
137	平成10年6月30日八十三	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.178	久保井
138	平成10年6月30日八十四	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.179	立井
139	平成10年6月30日八十五	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.180	久保井
140	平成10年6月30日八十六	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.181	立井
141	平成10年6月30日八十七	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.182	久保井
142	平成10年6月30日八十八	大安寺二丁目8-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古河市御園合意書交換	H10.183	立井
143	平成10年6月30日八十九	青柳町1-1	H10.6.30~H10.6.37	20d <sup>2</sup>	豊田市役所/古		



平成10年度概要報告書掲載免掘調査位置図 (1/40,000)

# I 平城京跡の調査

# 1 平城京右京三条四坊十坪・宝来遺跡の調査 第386次

- 1 事業名 大和中央道街路整備補助事業  
(菅原工区)
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第386次調査
- 4 所在地 奈良市宝来町地内
- 5 調査期間 平成9年9月8日～11月28日
- 6 調査面積 800m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 三好美穂・大庭淳司



発掘区位置図(1/6,000)

## 8 調査概要

標記事業は、その路線が平城京の北西の一画を縦断することから、工区の全域が事前発掘調査の対象となることが予想されるところであるが、このうち平成9年8月27日付奈良市長名で文化財保護法第57条の3に基づく通知のあった区間について発掘調査を行った。当該地は、平城京条坊復原では右京三条四坊十坪の西半部に相当する。

これまでにこの十坪内では、平成元年度に本調査地の東隣で事務所新築に伴う試掘調査（市平成元年度－第5次調査）を実施しており、その際に掘立柱列や土坑等を検出していることから遺構が良好な状態で残存していることが明らかになっている。

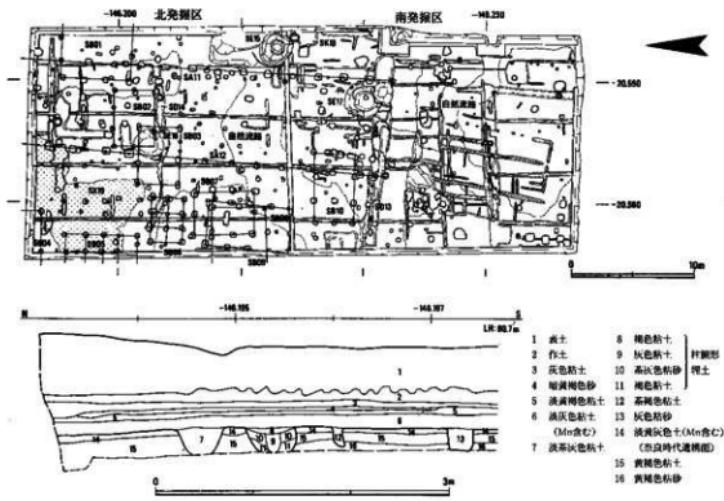
今回は十坪内の宅地の様相を把握することを主目的とし、南北2つの発掘区（総面積800m<sup>2</sup>）に分けて調査を行うことにした。発掘調査の途中で奈良時代の遺構面下に下層遺構があることが予想されたため、急速北発掘区北西隅部分で下層遺構の調査も併せて行った。

層相は両発掘区とも似ており、基本的には盛土、作土・床土（灰色粘土）、淡黄褐色粘土、マンガンを多く含む淡灰色粘土と続き、地表面下0.8～1.05mで奈良時代の遺構面である淡黄灰色土（標高79.6～79.8m）に至る。さらに北発掘区北西隅では、淡黄灰色土層の1層下に繩紋時代の遺構面である黄褐色粘砂層が堆積していた。

検出した主な遺構には、掘立柱建物10棟、掘立柱塀2条、井戸3基、溝2条、土坑1、溝状の遺構1、自然流路2がある。大半の遺構は奈良時代のものであるが、溝状の遺構は古墳時代以前と考えられる。下層では繩紋時代の土坑1基を検出した。

以下、奈良時代とそれ以前の遺構に分けて説明する。

**奈良時代の遺構** 掘立柱建物（S B01～10）は、建物主軸が方位に対して若干振れているものが多い。柱掘形はどれも浅く、検出面からの深さは概ね0.3mである。これらの建物は出土遺物が少ないとみるが、S B03の南西隅の柱掘形からは8世紀末頃と考えられる須恵器が出土した。重複関係から少なくとも、3時期以上の変遷があったことが判る。掘立柱塀（S A11・12）は、発掘区中央で検出した南北方向の塀で、主軸は国土方眼方位北で東へ振れる。S A11よりもS A12の方が振れが若干大きい。S A11は29.2m（14間）、S A12は27.7m（13間）分を検出し、2条とも北端は発掘区外へ続くと考えられる。柱掘形は、一辺0.6m、深さ0.6mと大きいものもあれば、一辺0.3m、深さ0.2mと小さいものもあり不揃いである。



構造平面図 (1/400)・北発掘区東壁土層図 (1/50)

S A11の南から5番目の柱軸形から土馬の脚部が1点、7番目からは黒色土器片2点、13番目からは軒丸瓦6138型式B種1点が出土した。2条とも重複関係からS D13よりも新しいことが判る。S D13は東西方向の溝で、溝幅1.0~1.4m、深さ0.1~0.2mである。溝内は大きく二層に分かれ、上層は暗黃褐色粘砂、下層は灰色細砂となっている。溝内から奈良時代の土師器・須恵器の他に、土馬の脚部2点が出土した。十坪を南北に三分割する位置にS D13があり、建物等を配する際の計画溝の可能性が考えられる。S D14は、S B02・06、S E16と重複して検出した東西方向の溝である。溝幅が0.1~1.0m、深さは0.1mと浅い。溝内には灰色粗砂が堆積し、出土遺物はない。

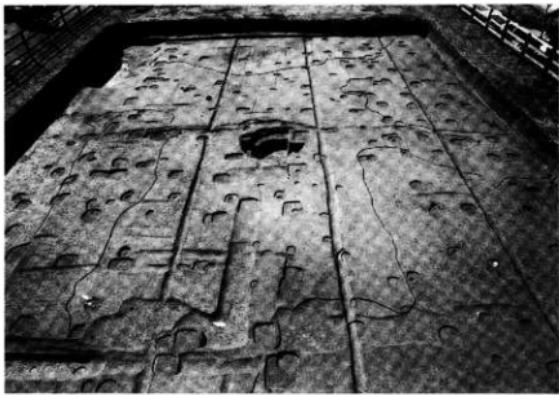
重複関係から建物や井戸よりも古いことが判り、奈良時代以前の溝である可能性も考えられる。井戸は3基検出されたが、いずれも井戸枠は抜きとられたらしく残存しない。S E15は検出面からの深さが3.3mある。埋土からは奈良時代中頃の土師器・須恵器が少量出土した。土師器皿の口縁部外面には「卅」と線刻されたものが1点ある。S E16は検出面からの深さは2.7mある。埋土からは、奈良時代中頃～後半にかけての土師器・須恵器が遺物整理箱で1箱分出土した他、木簡(証文は下に記す)、荷札、建築部材、棒状加工品、金属製釘等がある。S E17は検出面からの深さは1.6m。埋土からは、奈良時代の土師器・須恵器、木製しゃもじが出土した。漆用のパレットとして使われた須恵器杯も1点ある。この他にも漆用パレットに転用したと考えられる土器は、S E15・16、遺物包含層から9点出土している。S K18はS E15と重複して検出した土坑で、東側は発掘区外へと続き全体の規模・形状は不明である。埋土には淡灰色砂質土が堆積し、奈良時代の上師器・須恵器、サヌカイト片が含まれていた。



S E16出土木簡証文 □其□裏□ (130) ×31×4 081

井戸S E16出土木簡(1/2)

(三好美穂)



北発掘区全景（南から）



南発掘区全景（北から）



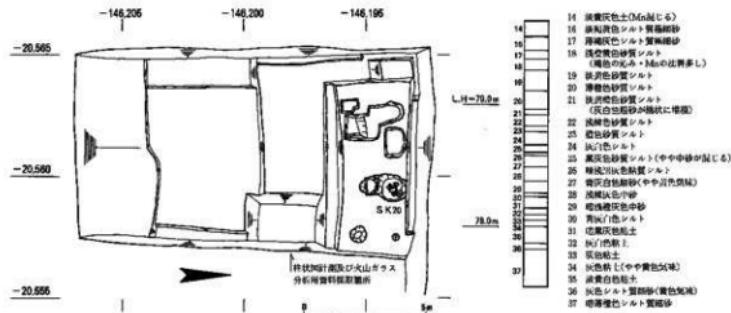
井戸SR16全景（北から）

### 古墳時代以前の遺構 溝状造構S X19と縄紋時代の土坑S K20がある。

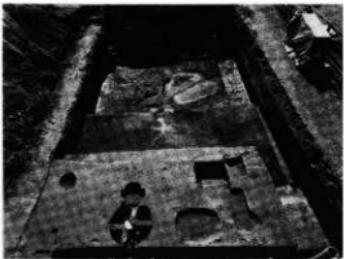
S X19は、北発掘区の北西隅で奈良時代の建物S B04・05、S A12と重複して検出した溝状の遺構で、西側は発掘区外へ続くため、全体の形状や規模は不明である。S X19の検出作業中、埋土から96点（剥片43、碎片53）の石器が出土したので、石器の出土が集中する範囲（X = -146, 195～-146,197、Y = -20,561～-20,564）で、埋土の掘削を行なった。S X19の検出面からの深さは0.12mと浅い。埋土は茶褐色粘砂で、土器片やサヌカイト製の石器194点（石鎌2、剥片25、碎片167）が出土した。さらに埋土を持ち帰り、1mmメッシュの篩を用いて水洗選別を行なったところ、サヌカイト製の石器を1435点（剥片1、碎片1434）採取した。以上、石器の総数は1725点となり、碎片が96%を占める。これらは縄紋～弥生時代のものと考えられるが、製品が少なく詳細な時期は不明。また、S X19埋土全体に散らばった状態で出土していることから、すべて二次堆積したものと考えられる。

さらに、S X19直下層以下5層（下層遺構調査区の第14・16～19層に対応）を掘り下げ精査したところ、下層遺構はなかったが、サヌカイト製の石器がS X19直下層（第14層）から8点（剥片2、碎片6）、第16層から1点（碎片1）出土した。また掘削後の排土を持ち帰り、水洗選別を行なったところ、各層中から総数456点（剥片8、碎片448）のサヌカイト製の石器を採取した。出土数の内訳はS X19直下層-285点（剥片3、碎片282）、第16層-71点（剥片4、碎片67）、第17層-68点（剥片1、碎片67）、第18層-19点（碎片19）、第19層-13点（碎片13）である。出土数は層が下になるにつれて少なくなるものの、遺構がさらに下層に存在する可能性が十分考えられたため、発掘区北西隅に南北約8m×東西約14mの発掘区を設定し、下層遺構の確認調査を行なった（以下この発掘区を下層遺構調査区と呼称する）。

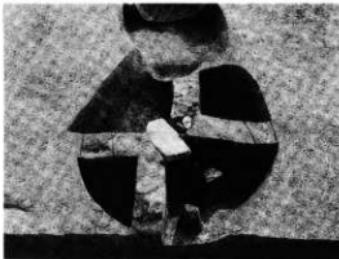
下層遺構調査区の層相は柱状図に示すとおりであるが、概ね第25層以下は、安定した水成堆積層が多く、湿潤な環境にあったと思われる。対して第14～24層は水成堆積ではあるが、不安定で層厚も一定ではない。環境が第25層以前と後で一変している可能性がある。遺構検出は、第16・19・24・25・31・35・37層上面で行なった。第16層上面において縄紋時代の土坑S K20を検出したが、第16層より下の層では遺構はなかった。S K20は南北約1.3m、東西約1.1mの楕円形で、深さ約0.3m。埋土は基本的に4層に分けられるが、いずれも土器、炭化物、灰を多く包含し、特にa層の包含率が高い。土坑中央部のb層上面では、板上の花崗岩、敲石2個、青色チャート



下層遺構調査区平面図（1/200）・土層柱状図（1/40）



### 下脇遺構調査区全景（北から）



### 土坑SK20(北から)

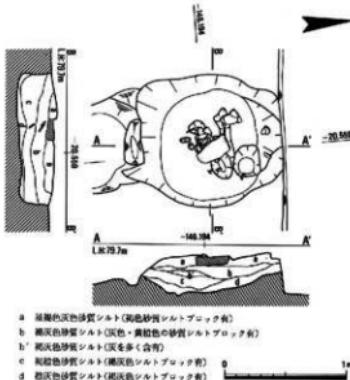
礫が据えられた状態で出土した。対照的に、b層以下の層では土器片や石器の出土状態は規則性がない。SK20埋土中からは、縄紋時代後期初頭の精製および粗製の深鉢が出土した。これらは中津式に属すると考えられる。この他にサヌカイト製の石鎌1点、剥片3点、碎片1点が出土した。

なお、下層遺構調査区東壁面において第25・31層の有機質土をサンプリングし、“C年代測定を行なった。結果、第25層は $5,470 \pm 60$  <補正 $5,410 \pm 60$  >y.B.P.、第31層は $6,050 \pm 60$  <補正 $6,030 \pm 60$  >y.B.P.であった。

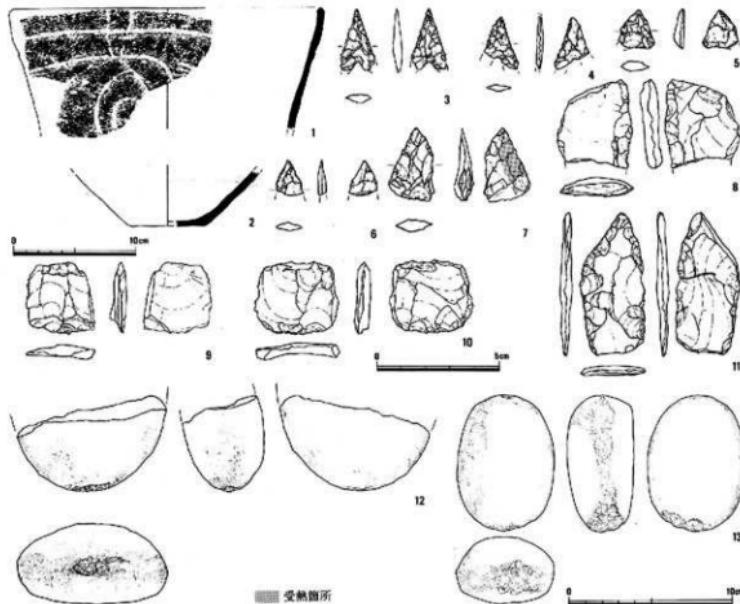
また、下層改構調査区東壁面の柱状図計測位置において、第25層以下第37層半ばまで41点の分析用資料を採取し、火山ガラス分析を行なった。特に第31層からアカホヤ(A h)火山灰層と第32層以下では始良(AT)火山ガラスが群を抜いており、第32層の上面がアカホヤ(A h)火山灰層については火山ガラスを多数含む層を区別でき

今回の調査では、奈良時代の造構面で繩紋～弥生時代のサヌカイト製石器を包含する溝状造構、その直下層で繩紋時代後期初頭の土坑を確認した。また、繩紋時代後期初頭の造構面より下層にサヌカイト製の石器を包含する層も確認した。周辺の繩紋時代の遺跡には、菅原東遺跡（中期）、平城宮佐紀池遺跡（中期後半）、西隆寺跡下層遺跡（晚期末葉船橋式）があることから、本調査地の近隣に繩紋時代後期初頭、またそれ以前の遺跡がある可能性が十分考えられる。今回確認したアカホヤ（A h）火山灰の陥落層、有機質土の年代をもとに遺跡の有無を探っていきたい。

古墳時代以前の出土遺物 土器類にはS K20出土の繩紋時代の土器の破片が遺物整理箱で1／5箱分ある。石器は総数2210点あり、S X19出土のものが1725点（石鎌2、剥片69、碎片1654）、S X19より下の層に含まれていたものが465点（剥片10、碎片455）、S K20出土のものが7点（石鎌1、敲石2、剥片3、碎片1）、奈良時代の造構から出土したものが13点（削器1、楔形石器2、不定刃器1、剥片9）ある。石材は、S K20出土の敲石2個が砂岩である以外は全てサヌ



土壤 SK30 平面：断面图 (1 / 40)



出土土器（1／4）・出土石器（1～10は1／2、11～13は1／3）

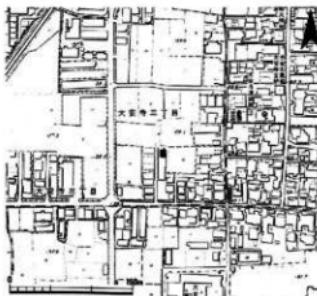
カイトである。以下、主なものを報告する。

1・2は、SK20出土の繩文土器であり、繩文時代後期初頭、中津式に属する。1は、直口形態の深鉢であり、太い凹線紋によりJ字状紋が描かれている。凹線紋で囲った内側には繩紋が施されているが、摩滅が著しく磨消の痕跡は残っていない。胎土中の粗い砂が表面に表れている。器厚は0.4～0.6cmで薄手。色調は赤褐色で黒斑が多く認められる。焼成は良好。2は深鉢の底部である。器厚は0.4～0.5cmで薄手。紋様はない。摩滅が著しく、胎土中の砂利、長石が露出している。色調は浅黄橙色で、焼成はやや良好である。また図示していないが、この他にSK20出土の粗製の深鉢部破片があり、二枚目による横位の条痕調整が表面の一部に残る。3・4は側縁が直線的で、全体形が二等辺三角形状の凹基式石器である。4は左側縁が鋸齒状で、両側縁の最終調整がほぼ全て腹面側からなされている。3はSX19、4はSK20出土である。5はSX19出土で、側縁が緩やかに外に張る平基式石器である。6はSX19出土で、石器未製品の先端部である。7はSK18出土の石器の未製品であるが、受熱しており細かいクラックが多数入る。8～11はいずれも奈良時代の遺構面上において出土した。8は削器である。縦長剥片を素材にしている。9・10は楔形石器であり、ともに下辺に潰れ状の剥離痕がみられ、10は右側縁に截断面がある。11は不定形刃器。両側縁に潰れ状の剥離痕がみられ、両極打法によって製作されている。先端部は石理に沿った折れを調整し、左右非対称に仕上げている。12・13はともにSK20出土の砂岩製の敲石である。敲打痕が12は下端に、13は上端および下端に残る。なお、13は左側縁と表面の一部に磨面を残し、磨石として利用された可能性がある。

（大塙淳司）

## 2 平城京左京六条三坊十五坪の調査 第401次

- 1 事業名 共同住宅建設
- 2 届出者名 大西一夫
- 3 調査次數 平城京第401次調査
- 4 調査地 奈良市大安寺三丁目82-1
- 5 調査期間 平成10年4月15日～4月22日
- 6 調査面積 60m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 秋山成人



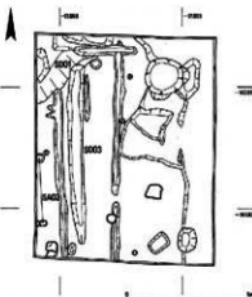
発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原によると左京六条三坊十五坪の中央南寄りに相当し、調査地の東側に大安寺旧境内が隣接する。調査は十五坪の宅地内の様相を知ることを目的に行なった。発掘区内の基本的な層相は、盛土、暗灰色土（作土）、赤灰色土、赤褐色土と続き、地表下0.5mで黄灰色粘質土の地山に至る。また発掘区の東辺沿いは地山が0.1m削平され、一段下がっている。地山上面の標高は発掘区西で57.4m、東で57.3mである。

検出遺構には、掘立柱列・溝がある。SD01は発掘区外北東から南西方向へ続く溝の東肩部分である。幅2.2m以上、長さ4.1m以上、深さ0.2m、断面皿状である。埋土は黄褐色粗砂である。遺物が出土せず詳しい時期はわからないが、層位から検出遺構中最も古いことがわかる。SA02は南北1間以上の掘立柱列である。柱筋の方向は北で若干西に振れる。柱間寸法は2.7mである。柱穴からは遺物が出土しなかった。SD03は柱列SA02に沿って東側で検出した溝で、柱列SA02の雨落溝と考えられる。幅0.6m、長さ7.3m、深さ0.37mで、断面U字形である。埋土は褐灰色土で、溝内から13世紀の羽釜が出土した。その他に発掘区北東隅で土坑を検出した。規模は径約1.5m、深さ1.54m以上あり、壁面は垂直に下降し、埋土は黒灰色土で、土師器小片と現代の廃材が出土した。出土遺物には、奈良時代の土師器壺・須恵器杯・皿・壺、中世の羽釜・瓦質土器、江戸時代の陶磁器碗があるが、いずれも小片で、器種不明のものも多い。

（秋山成人）



遺構平面図 (1/200)



発掘区全景 (西から)

### 3 平城京左京四条四坊十一坪の調査 第402次

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 1 事業名   | 大宮保育園園舎建設事業       |
| 2 通知者名  | 奈良市長 大川靖則         |
| 3 調査次数  | 平城京第402次調査        |
| 4 調査地   | 奈良市三条大宮町3番8号      |
| 5 調査期間  | 平成10年4月30日～5月27日  |
| 6 調査面積  | 170m <sup>2</sup> |
| 7 調査担当者 | 大庭淳司              |



発掘区位置図 (1/6,000)

#### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条四坊十一坪東辺のほぼ中央に相当し、平成9年度に実施した市第379次調査の北隣に位置する。<sup>11)</sup>調査は十一・十四坪坪境小路等の条坊遺構の検出を主目的とした。発掘区の層相は、盛土以下、作土が0.5～0.6m続き、標高62.4～62.6mで浅黄褐色シルトの地山に至る。遺構検出は地山および整地と考えられる灰色粘質土上面で行った。

検出した遺構には、奈良～平安時代の道路1条、溝2条、土坑23がある。以下、主な遺構について報告する。

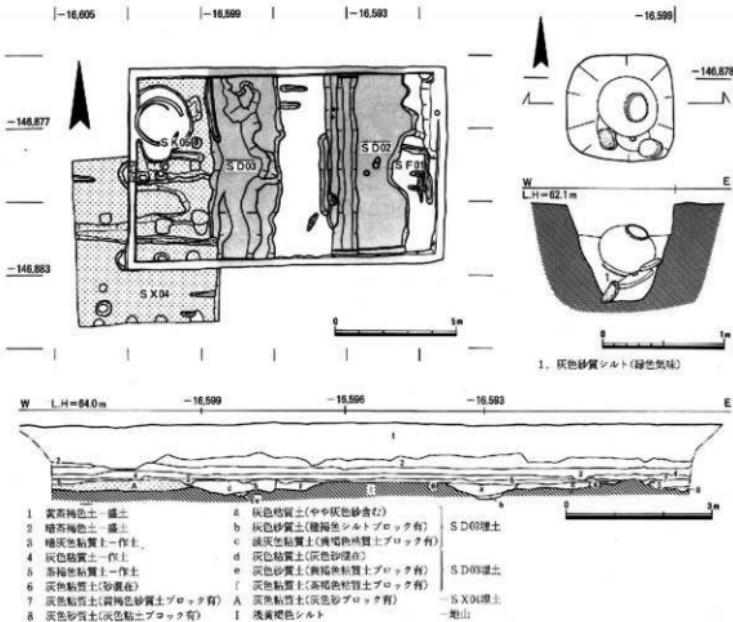
S F01は十一・十四坪坪境小路、S D02はその西側溝である。築地塀の痕跡は残っていないが、位置関係から S D03は、十一坪東辺を限る築地塀に伴う雨落溝であると考えられる。また堆積状態から S D02・03は一度改修されていると考えられ、S D02はc層の堆積後、S D03はf層の堆積後に改修されている。改修後の堆積はS D02がa層、S D03がd層と考えられ、改修後の幅員・深さはそれぞれS D02が約1.6m・約0.2m、S D03が約1.8m・約0.2mである。改修前の幅員は不明、深さはS D02が約0.3m、S D03が約0.4mである。2条の溝の改修の時期は、S D02のa・c層から8世紀末～9世紀初頭の土器、S D03のe・f層から8世紀末の土器、d層から9世紀前半～中頃の土器が出土していることから、共に8世紀末～9世紀初頭の範囲内と考えられる。こうした時期の改修は、平城京左京四条四坊十六坪でも同様である。九・十六坪坪境小路、十五・



発掘区全景（東から）



発掘区全景（西から）



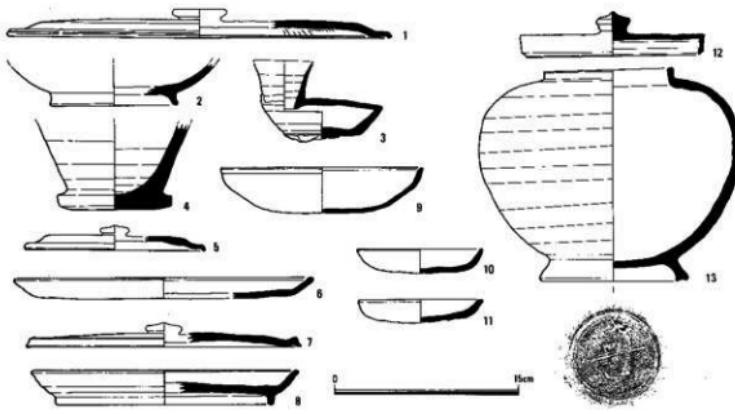
構造平面図(1/200)(左上)、土坑S K05平面・立面図(1/40)(右上)、発掘区北壁上層断面図(1/100)(下)十六坪境小路の側溝および築地に伴う雨落溝の改修は、出土土器から8世紀末～9世紀初頭と考えられる(市第334・345次調査)。またSD02・03の溝心の座標は、X=-146,874.5のとき、それぞれ改修前がY=-16,592.9、Y=-16,598.2、改修後がY=-16,593.0、Y=-16,598.4である。これらの座標値は、市第379次調査の成果と比して無理がない。

S X04はSD03の西に広がる整地土。8世紀末～9世紀初頭の土器を包含し、重複関係からSD03の改修より古い。

S K05は、地山上面で検出した方形の土坑で東西・南北がともに約0.9m、深さが約0.8mある。埋土内から9世紀前半の須恵器壺Aとその蓋、土師器皿Cが2枚出土した。いずれも据えられた状態ではない。壺Aは蓋の上面に寄り掛かり、皿Cは2枚が重なっていた。壺AはX線撮影を行い、内容物の有無を確認したが、遺物は無かった。

市第99調査においては、十一坪の南北1/2に位置する坪内道路およびその両側溝を検出している。溝心々間距離(4.0m)の中心は、Y=-16,680.0のとき概ねX=-146,878.2である。さらに市第353次調査第1発掘区で、平城京左京四条四坊十四坪の南北1/2に位置する坪内道路を検出している。この道路心の座標値がX=-146,878.6、Y=-16,563.0である。しかし東西方向の振れ $0^{\circ} 15' 41''$ (西で南偏)を考慮しても、当発掘区に十一坪を南北に二分割する構造はなかった。なお市第379次調査で坪の南北1/4の位置に築地に開く門が検出されており、今後、坪内の宅地利用を解明する調査が望まれる。

**出土遺物** 遺物整理箱で土器類が3箱分、瓦類が1箱分ある。



出土土器 (1/4)

上器類は奈良～平安時代の土師器・須恵器がほとんどで、他にはSD02・03から出土した古墳時代の壺の破片が数点ある程度である。ここではSD02・03、SX04、SK05から出土したものの中、主なものを報告する。

1～3はSD02出土。土師器には皿蓋(1)、杯B(2)がある。皿蓋は器表面の摩滅が著しいが、内面の一部に斜放射状暗文が残る。杯Bは内面をナデ調整、底部外面をヨコナデする。須恵器には平瓶(3)がある。また他に小片のため図示していないが、内面に漆が付着した須恵器杯が一点ある。平瓶は体部・口頸部外面をロクロナデ調整、底部外面をナデ調整する。口頸部外面に灰緑色の自然釉がかかり、底部外面には他の須恵器片が溶着している。いずれも南都I期中段階(8世紀末～9世紀初頭)のものと考えられる。4～6はSD03出土。須恵器には鉢F(4)、杯蓋(5)がある。鉢Fは口縁部内外面をロクロナデ調整し、底部外面は未調整である。杯蓋は縁部内外面をヨコナデし、頂部外面をロクロケズリ、内面をナデ調整する。土師器には皿A(6)がある。器表の摩耗が著しい。口縁端部をヨコナデ、内面をナデ調整する。いずれも南都I期新段階(9世紀初頭～9世紀中頃)のものと考えられる。7～9はSX05出土。須恵器には杯蓋(7)、皿B(8)がある。杯蓋は内外面をロクロナデ調整し、頂部外面をロクロケズリ調整する。皿Bは転用鏡である。底部内面に墨の痕跡が残る。内外面をロクロナデ調整し、高台は接合痕が残る。土師器には楕C(9)がある。いずれも南都I期中段階(8世紀末～9世紀初頭)のものと考えられる。10～13はSK05出土。土師器には皿C(10・11)がある。ともに口縁部の内外面をヨコナデ調整する。底部の内外面は未調整で、指頭圧痕が残る。10は口縁部に煤が付着し、灯明皿に使用されたと考えられる。須恵器には壺A(13)、およびその蓋(12)がある。壺Aは口縁部から体部にかけて内外面をロクロナデ調整し、体部下半外面をロクロケズリする。また底部外面に糸切りの痕跡が残る。12は外面および縁部内面をロクロナデ調整する。いずれも9世紀前半のものと考えられる。

(大庭淳司)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京左京四条西坊十一坪の調査 第379次」『奈良市埋蔵文化財調査 概要報告書(第1分冊) 平成9年度』1998
- 2) 奈良市教育委員会「平城京左京四条西坊十六坪の調査 第334・345次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』1997
- 3) 奈良市教育委員会「平城京左京四条西坊十一坪の調査 第99次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和60年度』1987
- 4) 奈良市教育委員会「平城京左京四条西坊十四坪の調査 第347・2・353-1次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』1997

## 4 平城京朱雀大路・下ツ道・尼辻東方遺跡の調査 第403次

- |         |                  |
|---------|------------------|
| 1 事業名   | 店舗建設             |
| 2 届出者名  | 吉田まさ子            |
| 3 調査次数  | 平城京第403次調査       |
| 4 調査地   | 奈良市三条大路三丁目444-1  |
| 5 調査期間  | 平成10年4月30日～5月19日 |
| 6 調査面積  | 90m <sup>2</sup> |
| 7 調査担当者 | 武田和哉             |



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は平城京の条坊復原では朱雀大路路面に該当し、さらに奈良時代以前の道路である下ツ道の東側溝が想定されている。調査はこの下ツ道東側溝の検出を目的として北、南の2発掘区を設定した。調査地の層相は、基本的には上から順に盛土、黒灰色粘質土、暗灰色土、黄灰色粘土と続き、地表下約0.3mで黄灰色粘質土(古墳時代遺物包含層)に到る。遺構の大半はこの上面から掘り込まれていた。その下に暗褐色粘質土の地山がある。地表から地山上面まで約0.4mを測る。遺構検出作業は地山上面で実施した。発掘区内で確認した地山上面の標高は、概ね63.9mである。検出した遺構には、古墳時代の溝、建物および下ツ道の東側溝がある。

S D01 南発掘区中央で検出した溝。長さ約6.5m分を検出。幅は1.4～1.6m、深さは0.5～0.6mで、V字状に掘られている。北北西から南南東に流れしており、土層の堆積状況の観察から2時期程度の変遷があった可能性がある。埋土から古墳時代中期後半の土器が出土した。

S D02 北・南発掘区のそれぞれ東側で検出した溝。長さは延べ約8.0m分を確認した。幅は約3.0m、検出面からの深さは0.4～0.5mを測る。北から南へと流れていることから、溝底には粗砂が0.2m程度堆積し、一定の水流があったことを伺わせている。氾濫痕跡もみられ、後述のS D03のような分流も存在する。埋土の上層からは古墳時代後期後半の土器が出土している。遺構の状況や位置などからみて、下ツ道の東側溝である可能性が高い。なお、南発掘区で検出した溝の中心の国土地標値は、(X=-146,312.00 Y=-18,572.05)である。

S D03 南発掘区で検出した溝。下ツ道東側溝の分流。南発掘区東辺の中央付近でS D02と合流する。長さは約3m分を検出した。幅は0.6～0.9m、検出面からの深さは約0.1mを測る

S B04 南発掘区南辺で検出した建物跡。柱筋は方位と一致しない。柱穴は全部で4箇所検出した。柱間は概ね1.5mを測る。柱穴は古墳時代の遺物包含層の上から掘り込まれていた。

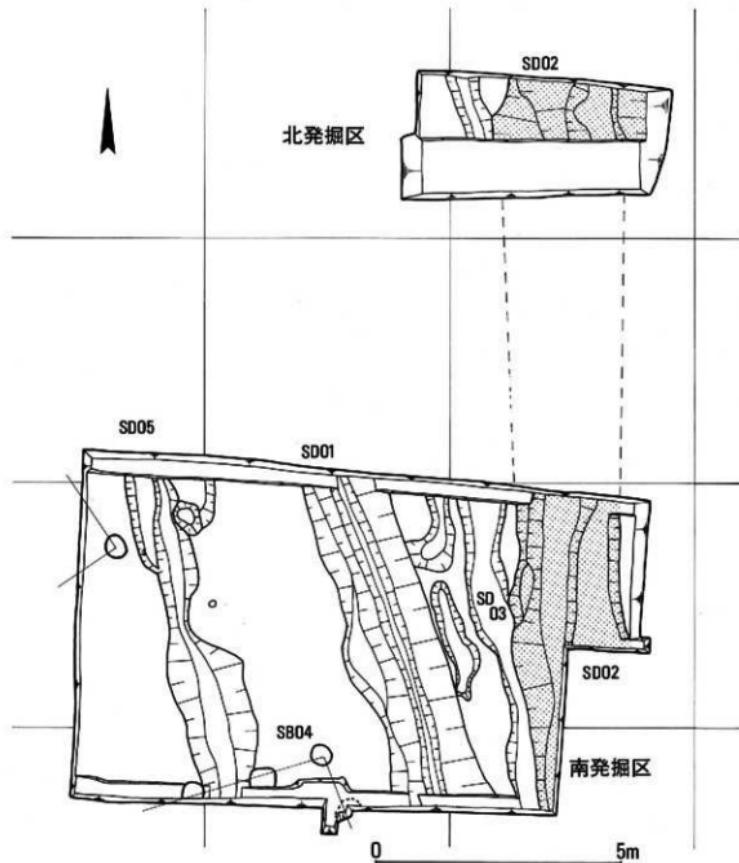
このほか南発掘区西辺でも柱穴を検出しており、発掘区外西へと続く可能性がある。

S D05 南発掘区西側で検出した溝。長さ約6.5m分を検出。幅は0.5～1.4mと一定でない。検出面からの深さは約0.1m。埋土は淡茶灰色粗砂が主体で遺物はなかった。 (武田和哉)

今回の調査では遺物整理箱約8箱分の遺物が出土し、大半は古墳時代の土器である。出土した古墳時代の土器には、中期後半のものと後期後半のものがある。以下その概要を記す。

1～18は中期後半の土器で、1～4・8・9・11～18は溝S D01から、7・9は遺物包含層か

ら出土した。1～11は須恵器である。1～3は杯蓋。体部は丸みを帯び、立ち上がり部との境の稜線は明瞭である。4～6は杯身。体部は丸みを帯び、口縁端部は内傾する。7・8は低脚高杯。脚部の透かしは3方向で、7は杯部下位と脚部の外面にカキメ調整が施されている。9は盞。頸部外面に櫛描波状紋がみられる。10・11は盞。10は口縁部から頸部にかけての部分で、外面に櫛描波状紋がみられる。11は体部で、中央部の外面に二条の沈線と櫛描波状紋とで構成された紋様帶がみられる。12～18は土師器である。12・13は杯。口縁部は外反する。14・15は高杯。14は杯部で、口縁部は外反し、脚部との接続部の外面には指頭圧痕がみられる。15は脚部で、軸部外面にはハラケズリ成形による端面が、内面には絞り目がみられる。16・17は甌。16は口縁部で、外面はナデ調整による条痕がみられ、内面はハケメ調整が施されている。17は肩部で、外面はハケ



造構平面図 (1/100)

目調整が、内面はヘラケズリ成形が施されている。18は瓶。体部に把手の剥離痕がみられる。

19・20は後期後半の須恵器で、それぞれ溝S D02上層から出土した。19は杯蓋。中期後半のものと比べて体部は平たく、立ち上がり部との境に稜線はみられない。20は杯身。中期後半のものと比べて立ち上がり部は短く内傾する。  
(安井宣也)

### まとめ

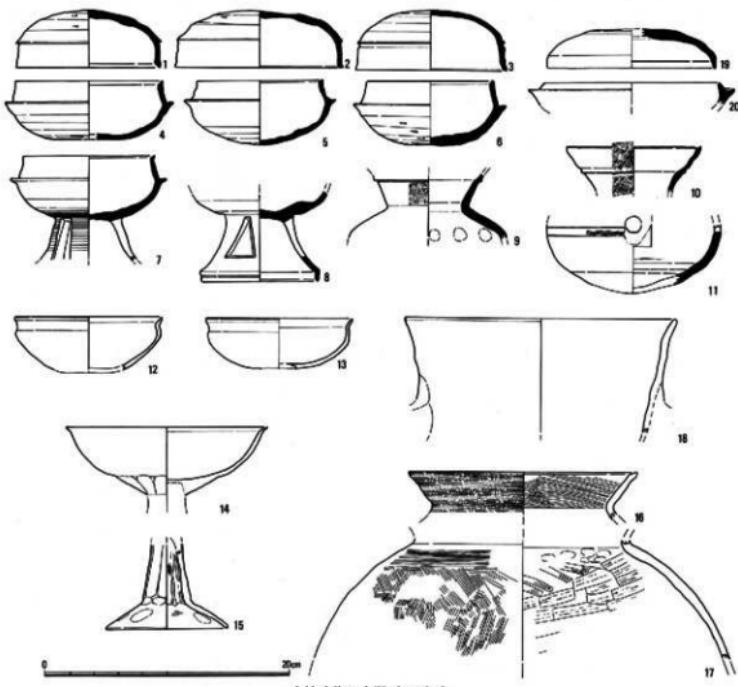
当調査地の周辺では、過去の調査で古墳時代の溝や建物跡がいくつか確認されており、今回検出した溝S D01や建物S B04は、遺構の時期や状況、その方位などからみて、それらと同じ範疇に含まれる遺構と推察される。

また、今回検出した下辺道東側溝S D02の位置は、近隣での確認事例と比較すると、1.2m程度東にずれた数値を示す。但し、この数値の差は極端な値ではなく、東側溝の施工時の誤差あるいはその後の氾濫等による幅の変化等に起因する可能性が高いと思われる。  
(武田和哉)

1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査研究報告 第2編 史跡平城朱雀大路跡 発掘調査・収蔵事業報告』1999

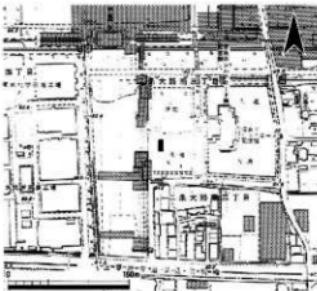


南発掘区全景（南から）



## 5 平城京左京三条一坊一坪の調査 第404次

- 1 事業名 朱雀大路緑地観光便所・休憩所  
新築工事
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第404次調査
- 4 調査地 奈良市二条大路南三丁目  
201番地の1
- 5 調査期間 平成10年7月3日～7月13日
- 6 調査面積 56m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 鎌方正樹



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

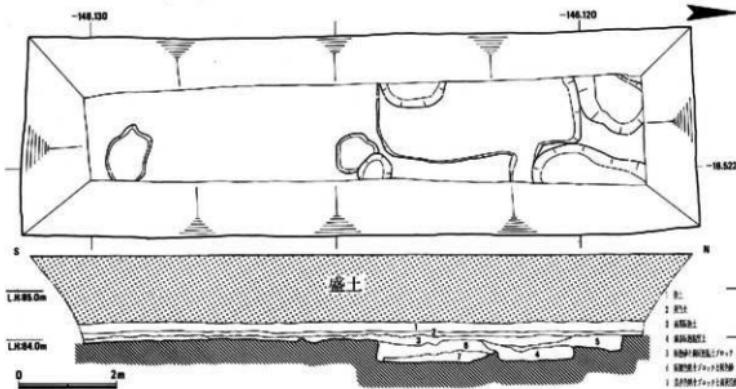
隣接する史跡朱雀大路内での調査成果から、当坪の外周には築地がなく、中央で坪を南北に二分する坪内道路が確認されている。従って、朱雀門前の広場的性格をも想定し調査を進めた。調査地には約1.4mもの盛土があり、その下に作土、灰色土、黄茶灰色土と統いて遺構面(地山)となる。

遺構面の標高は概ね64.0mである。検出した遺構には、土取り穴と思われる土坑6基があるに過ぎない。深さは25～50cmである。北半部で顕著に認められ、複数の土坑を掘削しては埋め戻すという過程を堆積土層の観察から推察できた。遺構面を構成する砂層部分のみを掘削しているので、砂の採取を目的に掘られたものであろうか。

(鎌方正樹)



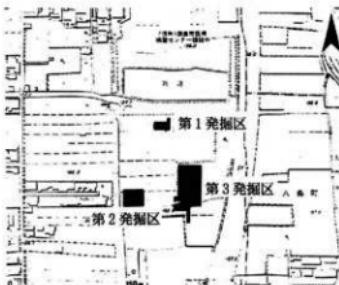
発掘区と朱雀門(東南から)



遺構平面図・西壁堆積土層図 (1/100)

## 6 平城京左京六条一坊十六坪の調査 第405次

- 1 事業名 店舗建設  
2 届出者名 八千代ムセン電機株式会社  
3 調査次数 平城京第405次調査  
4 調査地 奈良市柏木町459番地  
5 調査期間 平成10年7月24日～11月26日  
6 調査面積 2,275 m<sup>2</sup>  
7 調査担当者 森下浩行・池田裕英  
山前智敬



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

#### I はじめに

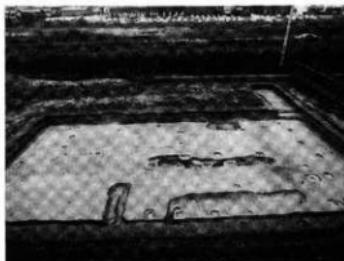
事業地は14,010 m<sup>2</sup>と広範なものであり、このうち店舗建設予定地を中心に3つの発掘区を設定した。調査地は、平城京の条坊復原では、左京六条一坊十六坪に相当する。北辺には五条大路、東辺には東一坊大路、西辺には九・十六坪坪境小路、南辺には十五・十六坪坪境小路が想定されている。坪北側の様相解明と五条大路検出を目的として第1発掘区(214 m<sup>2</sup>)を、坪南西側の様相解明を目的として第2発掘区(500 m<sup>2</sup>)を、坪南東側の様相解明と十五・十六坪坪境小路検出を目的として第3発掘区(1561 m<sup>2</sup>)を設定し調査を行った。

#### II 検出遺構

検出した遺構には、弥生時代の溝、土坑、古墳時代の掘立柱建物4棟、奈良時代の五条大路および同南側溝、十六坪北限掘立柱塀および同雨落溝、十五・十六坪坪境小路および同南北両側溝、十六坪南限築地塀および同雨落溝、掘立柱建物33棟、掘立柱塀9条、井戸4基、土坑、溝等が、また中・近世の土坑10がある。弥生時代と古墳時代の遺構は第3発掘区のみで検出した。奈良時代の遺構はすべての発掘区で検出した。中・近世の遺構は第1発掘区と第3発掘区で検出した。以下、各発掘区ごとに概要を述べる。

**第1発掘区** 発掘区内の基本的な層相は、上から黒色土(0.15m)、灰色土(0.15m)、黄灰色土(0.1m)と続き、現地表下約0.4mで黄褐色粘土の地山に至る。地山上面の標高は概ね56.7mである。検出した遺構には奈良時代の五条大路および同南側溝、十六坪北限掘立柱塀および同雨落溝、掘立柱建物4棟、溝、中・近世の土坑1がある。遺構はすべて地山上面で検出した。

五条大路を長さ約2m分、幅約3.5m分確認したが、発掘区北へと続くため幅員は不明である。五条大路南側溝は幅約1.2m、検出面からの深さ約0.3mである。長さ約2m分を確認した。溝心の国土地理院座標値はX=-147,628.70、Y=-18,117.



第1発掘区全景(南から)

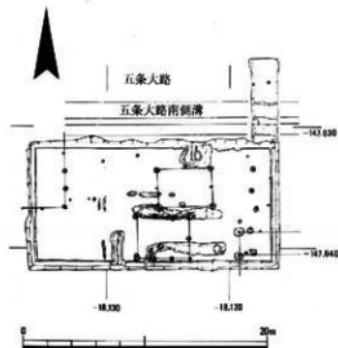
00である。五条大路南側溝の南で後述する雨落溝と南側溝に挟まれた幅約0.5mの空閑地がある。十六坪の北を限る閉塞施設が想定される。南側溝と雨落溝との間の幅を考えると掘立柱塀が妥当であると思われる。十六坪の北を限る掘立柱塀の南で雨落溝を検出した。幅約1m、検出面からの深さ約0.4mである。長さ約2m分を確認した。溝心の国土座標値はX = -147,630.24、Y = -18,117.00である。掘立柱建物は4棟ある。そのうち東西棟建物は桁行2間・梁間2間のもの1棟、桁行3間・梁間2間のもの1棟である。他2棟は、発掘区外へ続くため建物規模不明のものである。

**第2発掘区** 発掘区内の基本的な層相は、上から黒色土(0.2m)、灰色土(0.05m)、明茶灰土(0.05m)、茶灰色砂(0.15m)と続き、現地表下約0.5mで発掘区西では黄褐色粘土、発掘区東では淡茶灰色砂の地山に至る。地山上面の標高は概ね56.6mである。検出した遺構には奈良時代の掘立柱建物14棟、掘立柱塀4条、井戸1基、溝等がある。遺構はすべて地山上面で検出した。

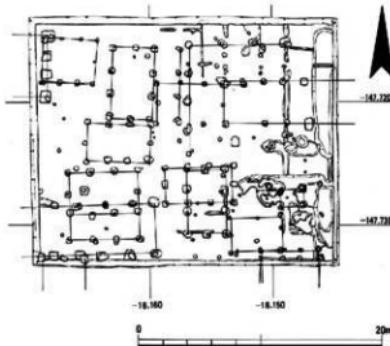
掘立柱建物は14棟ある。そのうち東西棟建物は8棟あり、桁行4間以上・梁間2間のもの1棟、桁行4間以上・梁間1間のもの1棟、桁行3間・梁間2間のもの3棟、桁行3間・梁間2間・南廂付きのもの1棟、桁行2間・梁間2間のもの1棟、桁行1間・梁間1間のもの1棟がある。桁行3間・梁間2間の南北棟建物が2棟ある。また、発掘区外へと続くため建物規模不明のものが4棟ある。建物の重複関係は3時期ある。掘立柱塀は4条ある。南北3間規模のもの1条、東西3間規模のもの1条、東西3間で西端で南北に曲がり南北4間規模のもの1条、東西4間で西端で南北2間規模のもの1条である。発掘区中央東寄りで井戸を検出した。掘形は平面隅丸方形で、東西約1m、南北約0.9m、検出面からの深さ約0.6mである。井戸枠はすべて抜き取られている。上部は別の遺構で削平されている。



第2発掘区全長(東から)



第1発掘区遺構平面図(1/400)



第2発掘区遺構平面図(1/400)



調査区全景（上が北）

**第3発掘区** 発掘区内の基本的な層相は、上から盛土（1.8m）、黒色土（0.1m）、茶灰色土（0.05m）、灰色粘土（0.1m）と続き、現地表下約2.1mで暗黄褐色粘土の地山に至る。発掘区東側には、奈良時代以前の包含層（暗褐色土・炭混）がある。地山上面の標高は概ね56.5mである。検出した遺構には弥生時代の溝、土坑、古墳時代の掘立柱建物、奈良時代の十五・十六坪坪境小路および同南北両側溝、十六坪南限築地塀および同雨落溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、溝等、中・近世の土坑がある。

弥生時代の遺構 溝7条、土坑54がある。以下、図示した遺物が出土した遺構について概要を述べる。

**S K01** 発掘区北で検出した土坑。東西約4m、南北約1.3m、検出面からの深さ約0.2mである。西側に遺物が多い。弥生土器（10）、弥生時代の石包丁（26）が出土した。

**S K02** 発掘区中央東で検出した土坑。東西約7m、南北約1.1m、検出面からの深さ約0.2mである。弥生土器（1・3・19）が出土した。

**S K03** 発掘区のはば中央で検出した土坑。東西約2.7m、南北約1.2m、検出面からの深さ約0.35mである。重複関係からS K04よりも古い。弥生土器（14）が出土した。

**S K04** 発掘区のはば中央で検出した平面不整形の土坑。東西約8.9m、南北約12.2m、検出面からの深さ0.2～0.5mである。弥生土器（4・6・11）が出土した。

**S K05** S K04の南で検出した土坑。東西約0.7m、南北約4m、検出面からの深さ0.45mである。弥生土器（12）が出土した。

**S K06** S D12のすぐ西で検出した土坑。東西約1.3m、南北約1.5m、検出面からの深さ約0.5mである。弥生土器（7）が出土した。

**S K07** 発掘区南で検出した平面不整形の土坑。東西約0.4m、南北約2.1m、検出面からの深さ約0.3mである。弥生土器（16）が出土した。

**S K08** 発掘区南で検出した土坑。東西約5m、南北約1m、検出面からの深さ0.3～0.7mである。弥生土器（20）が出土した。

**S K09** 発掘区南で検出した土坑。東西約2m、南北約1.5m、検出面からの深さ約1mである。弥生土器（17・18）が出土した。

**S K10** 発掘区南で検出した土坑。東西約2.3m、南北約2.3m、検出面からの深さ約0.5mである。弥生土器（8・13・22）が出土した。

**S K11** S K02の北で検出した土坑。東西約1m、南北約0.7m、検出面からの深さ約0.3mである。弥生土器、弥生時代の石包丁（25）が出土した。

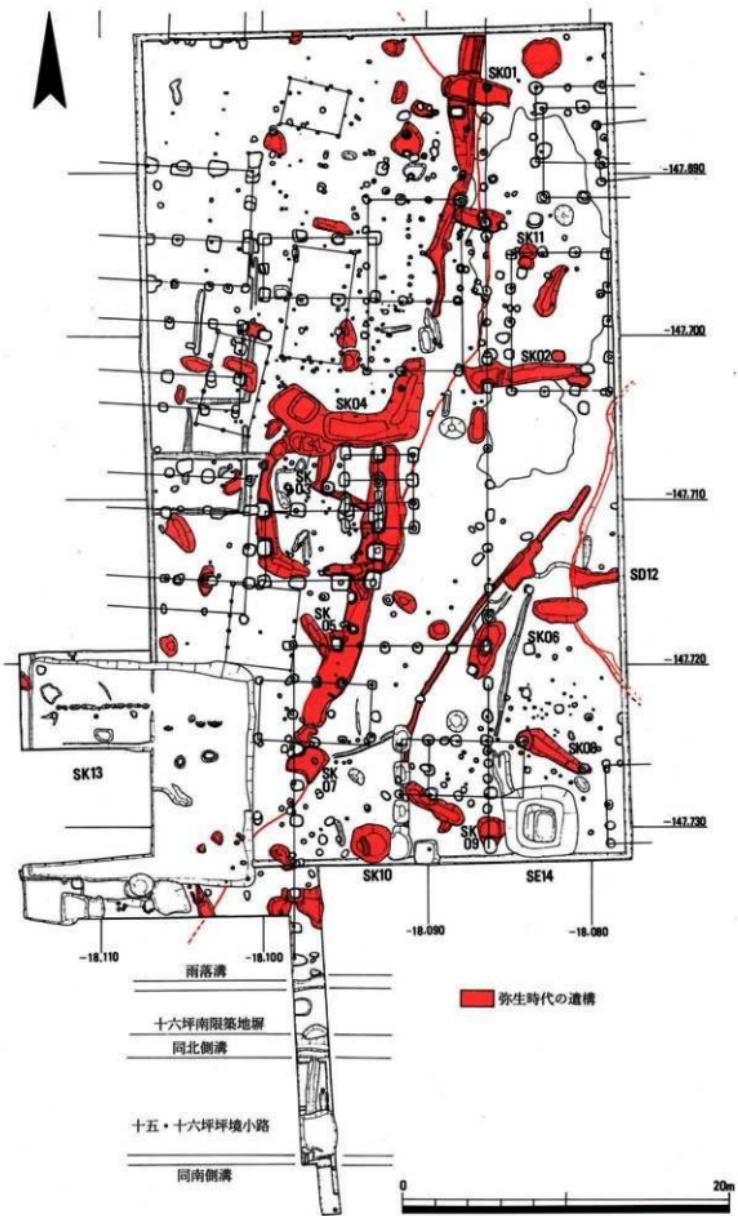
**S D12** 発掘区の中央東で検出した旧流路。発掘区東へと続くため幅は不明である。深さ1mまで確認した。弥生土器（2・5・9・15・21）、時期不明の石器（21）が出土した。

**古墳時代の遺構** 堀立柱建物4棟がある。

**奈良時代の遺構** 十五・十六坪坪境小路および同南北両側溝、十六坪南限築地塀および同雨落溝、掘立柱建物15棟、掘立柱塀5条、井戸3基、土坑、溝がある。



第3発掘区弥生時代遺構（北から）



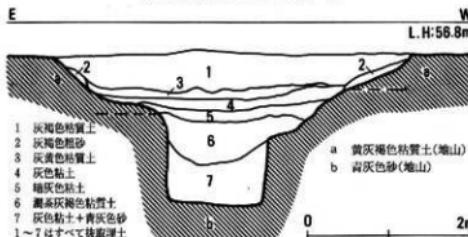
発掘区南で十五・十六坪坪境小路を検出した。路面幅は約6.2mである。道路心の国土座標値はX = -147,746.72、Y = -18,096.50である。また十五・十六坪坪境小路南北両側溝を検出した。北側溝は幅約1.9m、検出面からの深さ約0.7mである。長さ約2m分を確認した。溝心の国土座標値はX = -147,743.04、Y = -18,096.50である。南側溝は幅約0.5m、検出面からの深さ約0.1mである。長さ約2m分を確認した。溝心の国土座標値はX = -147,750.40、Y = -18,096.50である。十五・十六坪坪境小路側溝心間の距離は7.36mである。十五・十六坪坪境小路北側溝の北で後述する雨落溝と北側溝に挟まれた幅2.4mの空闊地がある。十六坪の南を限る閉塞施設が想定される。雨落溝と北側溝との間の幅を考えると築地塀が妥当であると思われる。十六坪の南を限る築地塀の北で雨落溝を検出した。幅約0.9m、検出面からの深さ約0.2mである。溝心の国土座標値はX = -147,739.30、Y = -18,096.50である。

掘立柱建物は15棟ある。そのうち東西棟建物は7棟あり、桁行3間・梁間2間のもの1棟、桁行4間・梁間1間のもの1棟、桁行3間・梁間2間のもの1棟、桁行3間・梁間2間・西廂付きのもの1棟、桁行3間以上・梁間2間・南廂付きのもの1棟、桁行2間以上・梁間2間・南廂付きのもの1棟、桁行2間以上・梁間2間・南北両廂付きのもの1棟である。南北棟建物は2棟あり、桁行5間・梁間3間のもの1棟、桁行4間・梁間3間のもの1棟である。総柱建物は桁行3間・梁間2間のもの1棟がある。発掘区外へと続くため建物規模不明のもの5棟がある。建物の重複関係は3時期ある。掘立柱塀は5条ある。南北16間以上の規模のもの1条、東西5間規模のもの1条、南北9間規模のもの1条で、この3条の塀は一連のものであろう。他に南北5間規模のもの1条、東西2間以上の規模のもの1条がある。

井戸は3基ある。すべて井戸枠は抜き取られている。以下、発掘区南東で検出したSE14について述べる。掘形は平面隅丸方形で、2段になっており、上段は東西約4.3m、南北約4.4m、下段は東西約1.3m、南北約1.8m、検出面からの深さ約1.9mである。堆積状況から、底から約0.5mまでは一気に埋め立てられ、それより上層は徐々に埋まっていったことがわかる。奈良時代の神功開寶の鋳放し銭と鋳型、鋳棹、坩堝、礪の羽口、炉壁、カラミが付着した瓦などの鑄造関連遺物（1～16）は各層位から出土している。特に濁茶灰色粘質土からの出土が多い。一括廃棄されたものであると思われ



第3発掘区井戸SE14(南から)



第3発掘区井戸SE14断面図(1/60)

る。他には、丸瓦、平瓦、土師器（22～29）、須恵器（30～34）が出土した。

最後に、発掘区南西で検出したSK13について述べる。掘形は平面隅丸方形で堆積状況から上層・中層・下層の3層にわけられ、各層ごとに平面規模も異なる。上層は東西約10.3m、南北約12m、埋土は2層あり暗黄褐色粘土、灰色土である。中層は東西約5.5m、南北1.3m以上、埋土は1層で黄褐色土（暗褐色土混）である。下層は東西約13.5m、南北約13.2m、埋土は2層あり淡黄褐色土（暗褐色土混）、褐灰色土（黄褐色土・暗褐色土混）である。検出面からの深さは上層・中層・下層あわせて約0.4mである。中層の上面で柱穴を数個検出した。上層からは奈良時代の軒平瓦6727A1点、軒平瓦型式不明3点、丸瓦、平瓦、奈良時代前半の土器（4・7・10・11・12・14・16・18）が出土した。中層からは奈良時代前半の土器（6・9）が、下層からは奈良時代の軒平瓦型式不明2点、奈良時代前半の土器（1・2・8・13・17・19・20・21）が出土した。その他に、上・中・下各層から出土した土器が接合するもの（3）、上・中各層から出土した土器が接合するもの（5）、SK13から出土したもの（15）、時期不明の石鎚（18）などが出土した。

中・近世の遺構 土坑9がある。発掘区中央南に集中している。

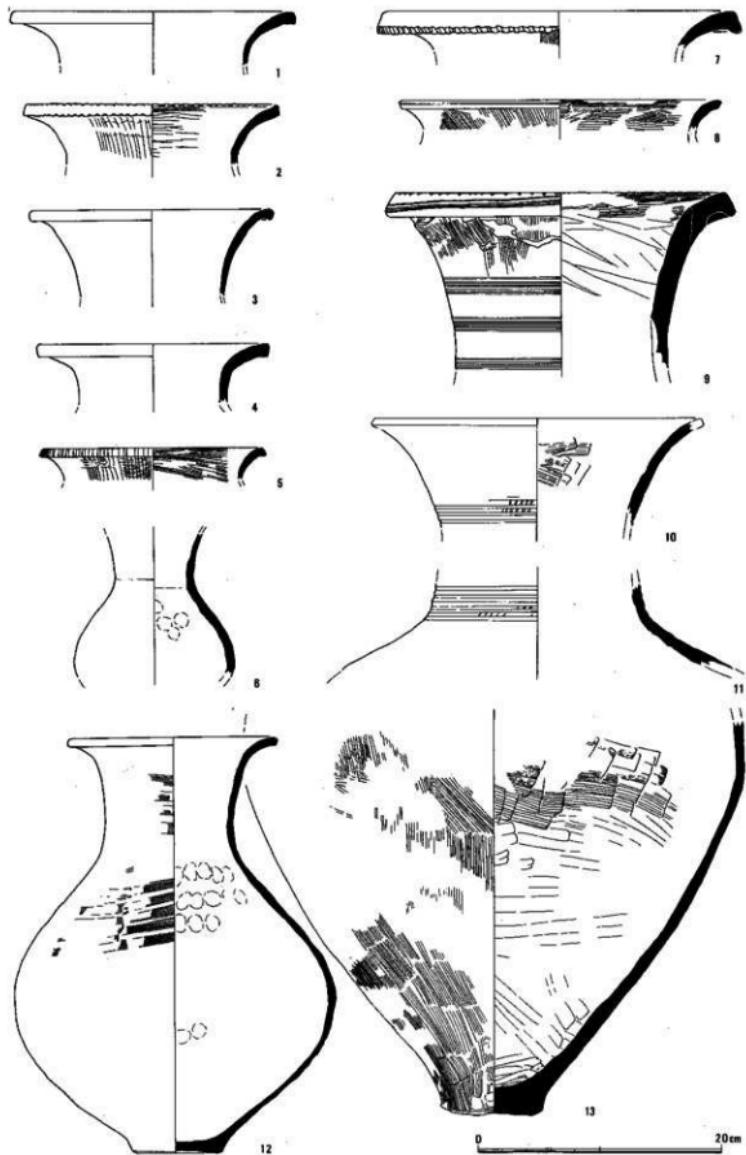
### III 出土遺物

遺物は各発掘区から出土しており整理箱で27箱分ある。弥生時代の土器、古墳時代の土器、奈良時代の軒平瓦、丸瓦、平瓦、埴、土師器、須恵器、神功開寶の鑄放し銭と鑄型、鉛錠、埴輪の羽口、カラミが付着した瓦、銅滓などの鋳造関連遺物、時期不明の石鎚、スクレイバー、楔形石器、石包丁、石錐などの石器がある。以下、主な遺物について述べる。

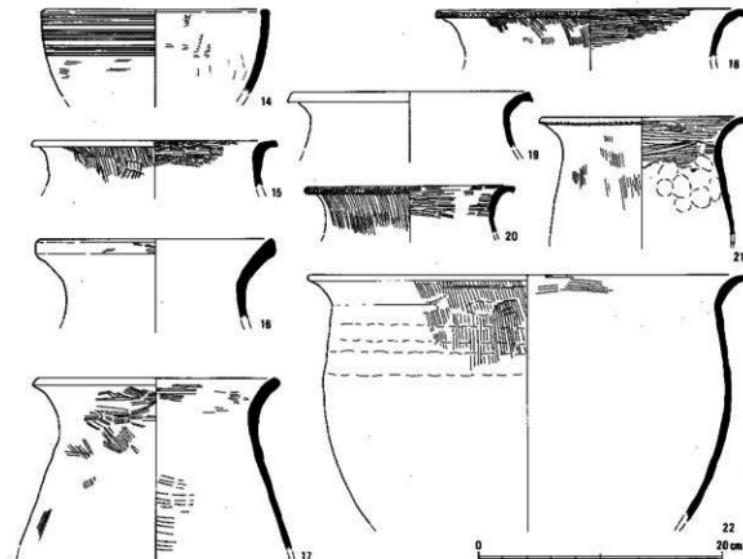
瓦類 遺物整理箱で4箱分出土した。大半は丸瓦、平瓦であるが、軒平瓦9点、埴4点がある。軒平瓦の型式・種の出土点数の内訳は6711B1点、6727A1点、型式不明7点である。軒平瓦は第1発掘区から1点、第2発掘区から1点、第3発掘区から7点出土した。（山前智敬）

土器類 遺物整理箱で20箱分出土した。弥生時代の土器6箱、古墳時代の土器少量、奈良時代の土器14箱、中・近世の土器少量である。以下、弥生時代と奈良時代の主な土器について述べる。

弥生時代の土器 壺あるいは甕が人半を占める。全体を復原できるものは非常に少なく、器壁の剥落も著しい。1～5・7～10は広口壺の口縁部。7～10は人形で、口径26.4～28.3cm。1～5は口径17.8～22.8cm。頸部の器壁の厚さは0.6cm前後だが、9は1.6cmと厚手である。外上方に広がる。端部はいずれも外側に面を成し、上方につまみあげるもの（2）、下方につまむもの（1・3・4）、斜め下方に垂下するもの（5・7）、斜め下方に垂下したのちに隙間を充填しているもの（9）がある。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケがみられる。口縁端部には刻目がみられ、施紋箇所は、端部上縁（9）、下縁（7）、上下縁（2）である。5の口縁部外面にはタテハケがみられる。9の外面には、口縁端部に1条、頸部に3条の櫛描紋がみられ、また、破断面では擬口縁にもハケがみられる。10の頸部外面にはヘラ描き沈線が数条みられ、その間に刻目がみられる。11は10の頸部から体部。8は13の口縁部。口径26.4cm。13は大形壺の体部下半。最大径41.1cm。内外面ともにハケがみられる。9は小形壺の口縁部から体部。体部はしもぶくれ。12の広口壺はほぼ完存。口径17.1cm、器高34.0cm。外面には頸部に4条の櫛描紋、体部上半に流水紋と波状紋が、内面には指頭圧痕がみられる。14は鉢。口径18.7cm。内湾気味の口縁部で、外面に3条の櫛描紋がみられる。内面はハケ。15～22は甕の口縁部から体部。15・20は口縁部が二字状に屈曲するが、ほかは緩やかに外反して口縁部と体部との境に明瞭な屈曲線はみられない。15～17・19～21は小形で、口径16.7～19.5cm、22は大形で、口径36.0cm。18は口径25.0cm。外面



出土陶器 (1/4)



出土赤土器（1／4）

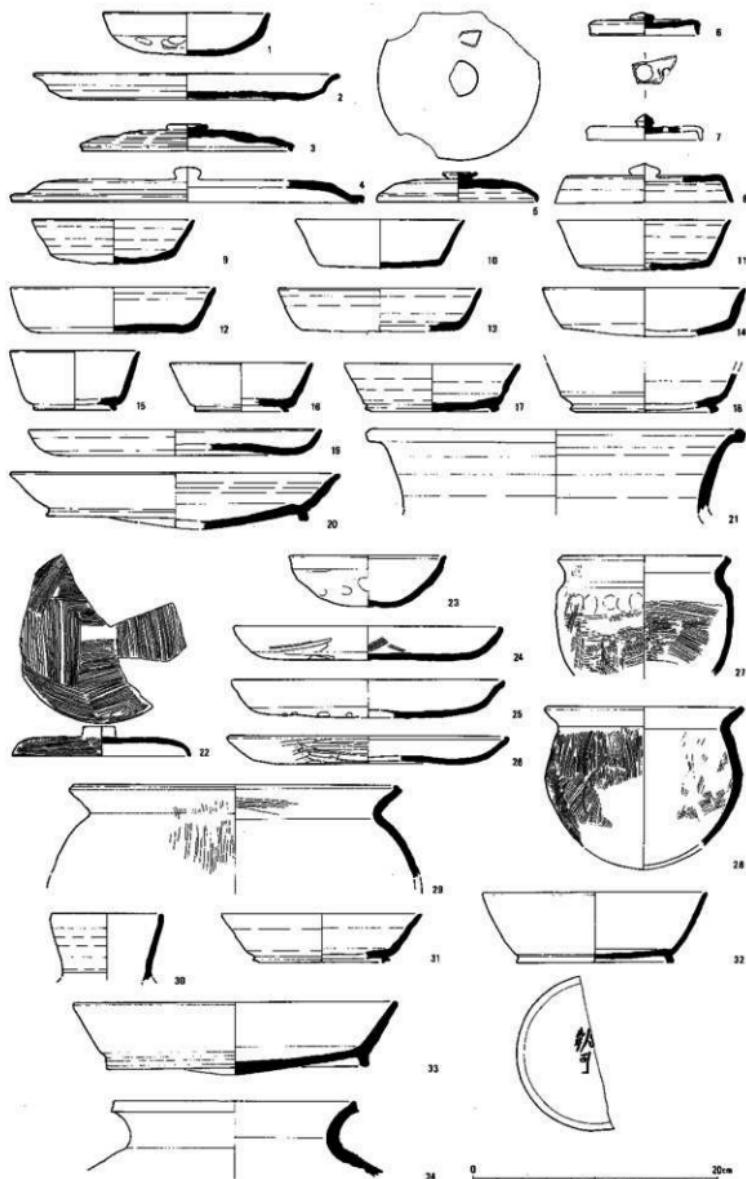
にはタテハケが、内面にはヨコハケがみられる。17は外面にミガキ、内面にハケがみられる。22は体部の口縁近くをハケの上からヨコナデしている。18・20・21の口縁端部にはハケ工具を使用したと思われる刻日が、16には波状紋がみられる。施絞箇所は、端部下縁（21）と外面（16・18・20）である。

（森下浩行）

**奈良時代の土器** 今回の調査では、3つの調査区いずれもから奈良時代の土器が出土しているが、現在も整理中であり、その詳細については現時点では不明であるが、ここでは第3発掘区のSK13とSE14から出土した土器について概述する。

1～21はSK13から出土した土器である。1・2が十師器で、1が碗C、2が皿Aである。碗Cは外面に指頭圧痕が残るが、皿Aは剥落が激しく調整は不明である。3～21は須恵器で、3～8が蓋、9～14が杯A、15～18が杯B、19が皿A、20が皿B、21が壺である。3～8の蓋は3・5が杯Bの、4が皿Bの、6～8が壺の蓋になると思われる。また、5の頂部外面には線刻がみられ、文字もしくはヘラ記号のようなものと考えられる。7の蓋の頂部には孔が穿たれている。鉢のようなものでも通していたのであろうか。杯Aは口径で2つに分けられるようである。9～11が13.7～14.0cm、12～14が16.5～16.6cmである。

22～34は神功開寶の鋳放し銭と鋳型が出土した井戸SE14から出土した土器である。22～29が十師器で、22が蓋、23が碗C、24～26が皿A、27～29が壺である。蓋の頂部外面には丁寧なへらみがきが施されている。皿Aの法量は21.6～22.6cm、器高は2.3～3.1cmである。25の底部外面には墨痕がみられるが、文字かどうかは判別できない。30～34は須恵器で、30はおそらく瓶類の口縁部であろう。31・32が杯B、33が皿B、34が壺である。32の杯Bの底部外面には墨書がみられ、「朝司」と読める。「司」とあることから、邸内の家政機関の名称かとも思われるが詳細は不明で



出土奈良時代土器 (1/4)

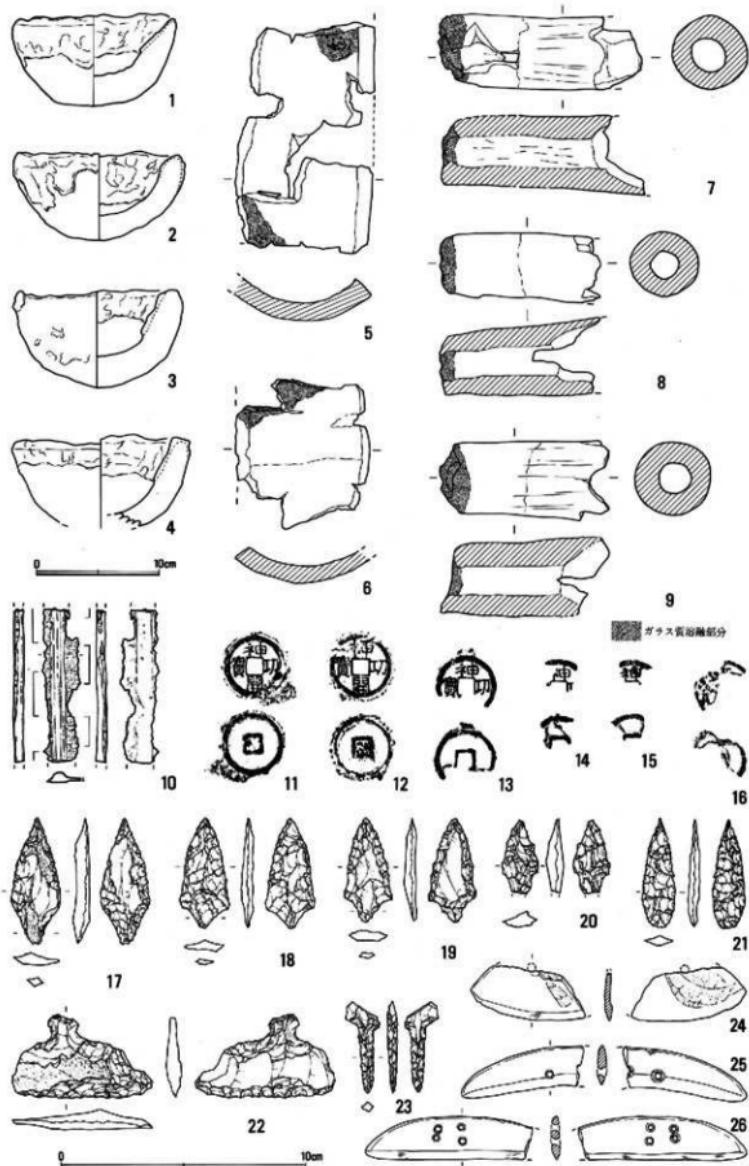
ある。

これらの上器の時期であるが、器形や調整手法、法量などからみてSK13は奈良時代前半、SE14は奈良時代末に位置づけられるのではないかと思われる。 (池田裕英)

鑄造関連遺物 井戸SE14から神功開寶(初鉄765年)の鋳放し銭と鋳型、鋳棒、壇堀、輪の羽口、炉壁、カラミが付着した瓦、銅滓、木炭が遺物整理箱2箱分出土した。以下、これらのうち主なものについて述べる。

1~4は壇堀である。いずれも底の丸い楕形で、胎土は粗砂粒を多く含む。1は口縁端部をとがり気味におさめるが、他は丸くおさめる。いずれも内面、外面ともに熱を受けている。色調は1~3の底部外面は灰白色から橙灰色、口縁部外面から内面全体にかけては暗紫灰色である。4の外面は暗紫灰色から黒灰色、内面は灰色である。いずれの口縁部でも、多くの部分が熔融して暗赤色のガラス質に変質したり、白灰色やオリーブ灰色に変色し泡立ったりする。1・2の口縁部外面から内面全体、特に口縁端部から内面上半にかけてはやや厚く黒灰色や暗赤灰色のカラミが残る。3・4は口縁部外面から内面上半までカラミが厚く付着するが、内面底部には付着していない。また、口縁端部から底面の外面全体にわたって、白色や橙灰色の薄い焼上がり2~3層の膜状に付着する部分があり、そのうちカラミと互角になる部分もある。このことから複数回使用されたことが分かる。最大容量は、1・4は300cc、2は200cc、3は280ccである。5・6はカラミが付着した瓦である。どちらも丸瓦を継に半裁したもので、全面に被熱による白灰色やオリーブ灰色の変色がみられ、一部には赤色や黒色のガラス状に熔融してひどく泡立つ箇所がある。用途は不明であるが、壇堀を熱する際の風除けに使用した可能性もある。7~9は輪の羽口である。いずれも先端部は暗赤色や黒色に熔融して泡立ち、黒色や暗赤色、暗青色のカラミが薄く付着している。外面は概ね白オリーブ灰色、内面の先端付近は明橙色、残りは灰黄色である。孔は先端から2/3程までは直線的で、そこから元口に向かってラッパ状に開く。外面は一部に細い棒状のものを押付けたような痕跡があるが、概ねコピナデやハケメで調整し、内面はシボリ痕があるものや、棒状のものを回転させるなどして調整するものがある。ラッパ状部分の内面は摩擦により荒れている。胎土は粗砂粒を多く含む。10は鋳棒である。湯道は幅0.6cm、厚さ0.4cmの半円柱状で上下の区別はつかない。輪郭が不明瞭な壠が左右段違いに3ヶ所ずつあり、銭を切り離した痕跡が認められる。11~15は神功開寶の鋳放し銭である。11は功字の旁を「刀」に、開字は不隸開につくる。銭文はやや不鮮明で、功字と開字の間は型がつぶれ、その外側に壠が残り、切断痕が認められる。背面の鋳出しが浅い。径2.54cm。12は功字の旁を「刀」に、開字は隸開につくる。銭文は上部と開字の下部の範囲を除いて深く鮮明である。背面は鋳出しが浅く、型ずれがある。外縁の厚さは外に向けて薄くなる。左やや下方に壠が残り、切断痕が認められる。径2.53cm。13~15は湯回りが悪く、完形にならなかったものである。13は功字の旁を「刀」につくる。銭文はやや不鮮明で、背面の鋳出しが浅い。以上の鋳放し銭は不良品のため廃棄されたものであろう。16は銅滴が付着し、全体が溶けかけているため銭文は不明だが、わずかに鋳張りが認められるので、湯回りの悪い不良品を原料として再利用しようとしたものか。鋳型はほとんどが細片のため全容は不明であるが、厚さ1cm程の粘土板の上に0.5cm前後の真上を重ねた焼型であると考えられる。銭文や外縁・内郭が確認できるものは38点あり、このうちほぼ銭1枚分を確認できるものが1点ある。これは功字の旁を「刀」に、開字は不隸開につくる。 (原田香織)

石器 石器は総数372点出土している。17は第1発掘区の包含層から、19・23は第3発掘区の包含層から、22・24は第3発掘区の柱穴埋土から出土した。20は表探である。大半は剥片であり、



鉄造関連遺物・石器 (1~9・24~26は1/4、他は1/2)

石材は石包丁、石斧、敲石、磨石以外は全て安山石である。主な器種は石鐵（未製出含む）33点、スクレイバー（石匙含む）13点、楔形石器20点、石包丁4点、石錐・大型蛤刃石斧・敲石・磨石各1点がある。石鐵は17~20のような大型の有茎鐵が特徴的である。21のような凸基式や小型の凹基式も出土しており、各種の形態が認められる。22は石匙である。表裏に素材面を大きく残しておらず、加工は比較的粗い。23は石錐である。頭部上半は折損しているが、折れ面から剥離が施されており、使用が継続されたことがうかがえる。24~26は石包丁である。24は片刃の外湾刃形で、紐孔より上部を欠損している。裏面には素材剥離時の面が研ぎ残されている。25は両刃で、直線刃形のものが研ぎ直しによって内湾刃となってしまったものと思われ、紐部まで刃面が研ぎ出されている。26は両刃の直線刃形であるが刃面の研ぎ出しは表裏非対称で、ほぼ片刃といえる形態である。紐孔は上方が新しいと判断され、刃縁に平行に穿孔し直されたものであろう。石包丁の石材は全て緑色片岩である。石器の出土はほとんど二次堆積層からで、時期については不明な点が多い。

（松浦五輪美）

#### IVまとめ

今回の調査では神功開寶の鋳放し錢および鋳型、坩堝、櫛の羽口、炉壁などの鋳造関連遺物が出土した。神功開寶の鋳放し錢および鋳型は初出である。これまで皇朝十二錢のうち鋳放し錢および鋳型が出土しているのは和同開珎のみであった。しかし近年、古代銭貨の生産を考える上で重要な発見が相次いでいる。大阪の細工谷遺跡では和同開珎の枝錢および鋳放し錢が、飛鳥池遺跡では富木錢の鋳放し錢や鋳模、坩堝や櫛の羽口などの鋳造関連遺物が出土している。

平城宮・京内で和同開珎の鋳放し錢が出土しているのは4箇所ある。平城宮推定第2次朝堂院地区の東大溝S D2700<sup>3)</sup>、平城京左京三条四坊七坪<sup>4)</sup>、平城京左京三条四坊十二坪<sup>5)</sup>、東市推定地東掘河<sup>6)</sup>である。また鋳型が出土しているのは平城京左京三条四坊七坪と長門の銭司に比定されている山口県下関市長府町覚寺境内の2ヶ所だけである。平城京左京三条四坊七坪では焼土ピット群から和同開珎の鋳放し錢および鋳型、坩堝、櫛の羽口、木炭が出土している。焼土ピット群は炉跡と考えられおり、この地に和同開珎の銭工房があったことは確実である。

今回の調査では炉跡の遺構は残っていないが、鋳放し錢および鋳型、鋳造関連遺物の出土状況からみて十六坪内に神功開寶の鋳造を行なった工房があったと考えられる。これまでの調査成果と併せて平城宮内には和同開珎および神功開寶の銭工房があったことになる。しかしながら、史料に平城宮内に銭貨の鋳造施設を設置したという記事はない。また、度々私鋳錢を禁止した記事から私鋳錢が横行していたことがうかがえる。だが、考古学的に銭貨の真贋を判断する明確な基準がないので、十六坪の銭工房が私鋳工房か官営工房かを述べることはできない。このことについては今後の調査研究の進展に委ねる。

また、これまで皇朝十二錢のうち和同開珎以外の鋳型が出土していないのは生型（砂型）を使っていたため残らないと考えられていたが、今回の発見で少なくとも神功開寶の鋳造の際には焼型（真土型）が用いられていることが初めてわかった。このことは、日本貨幣史を考える上で貴重な発見であるといえよう。

（山前智敬）

1) 財團法人 大阪市文化財協会「大阪市大王区 錦上谷遺跡発掘調査報告」1-都市計画道路難波片江線建設に伴う発掘調査報告書 1999

2) 松村恵司「飛鳥池遺跡出土の古木錢」(『月刊 考古学』ジャーナル442号) ニュー・サイエンス社 1999

3) 奈良国立文化財研究所「昭和40年・平成2年調査結果報告書」1987

4) 奈良国立文化財研究所「奈良市近畿文化財調査概要報告書 平成10年度」1999

5) 奈良市教育委員会「奈良市近畿文化財調査概要報告書 平成10年度」1999

6) 奈良国立文化財研究所「平城京左京八条三坊発掘調査報告 東市周辺北東地域の調査」1976

7) 岡西大学博物館「博物館資料誌」岡西大学出版社 1998

8) 東京国立博物館「特別展 日本の考古学—その歩みと成果」1998

9) 国立歴史民俗博物館「お金の玉手箱—銭貨の列島2000年史」—1997

## 7 平城京左京四条四坊三・六・十一坪の調査 第406・414次

- 1 事業名 三条添川大宮線地方特定道路整備事業
- 2 届出者 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第406・414次調査
- 4 所在地 奈良市三条大宮町地内
- 5 調査期間 第406次 平成10年7月28日～8月11日  
第414次 平成10年11月2日～11月25日
- 6 調査面積 284m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 三好美穂・松浦五輪美
- 8 調査概要



発掘区位置図 (1/6,000)

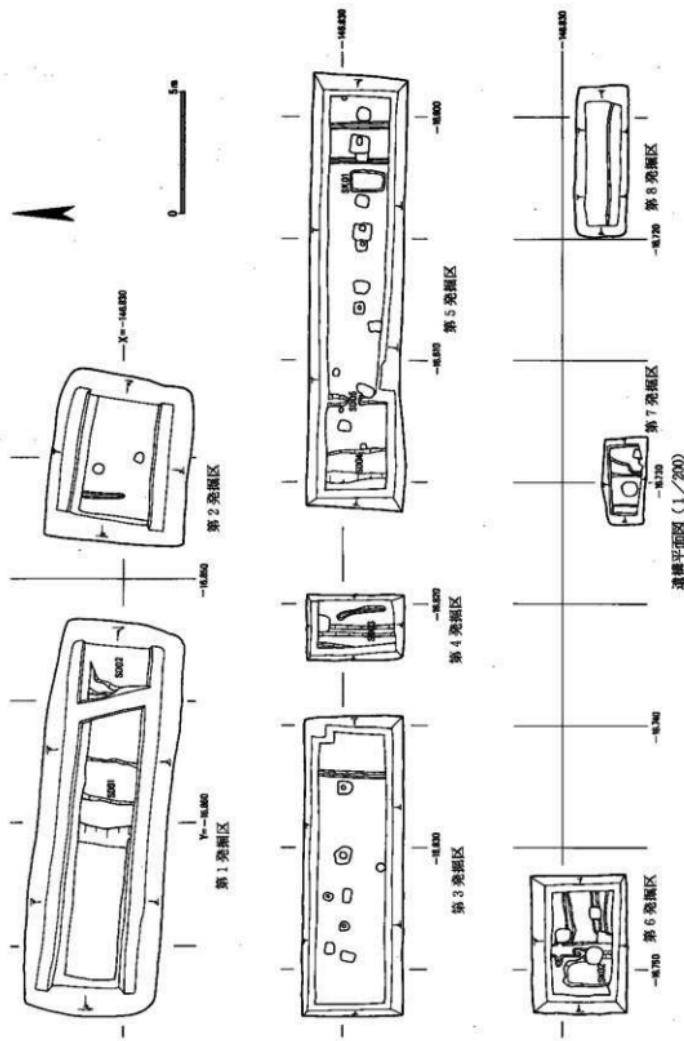
調査地は、平城京四条坊復原では左京四条四坊間路の南沿いで、三・六・十一坪の北辺にあたる。発掘区は現在の市道に沿った細長いものとなり、建物の検出は困難と予測されたため、三・六坪および六・十一坪の坪境小路の検出を主な目的として調査を行なった。2次にわたる調査で計8箇所の発掘区を設定し、便宜上西から第1～8の発掘区番号を付けた。

調査地の層序は、基本的に盛土・作土直下が青灰褐色粘土もしくはシルトの奈良時代造構面となっており、全発掘区とも地表下1m前後でその面に達する。地形は東から西へ緩やかに下っており、造構面の標高は第1発掘区が61.8m、東に150m離れた第8発掘区で62.4mである。検出した主な造構は、奈良時代から平安時代の溝5条、土坑2基があり、そのほか柱掘形が20箇所あるが明確な建物としては捉えられない。

第1発掘区で検出した南北溝SD01・02は条坊に関する造構の可能性がある。これまでの周辺の調査成果から、三・六坪坪境小路はこの地点で道路心が国土座標Y = -16,865.3付近を通ると推定され、これらの溝が小路の両側溝とも考えられる。しかし道路幅が狭すぎ、今回の調査では断定できない。ただしSD02の埋土には深さ0.5mほどの砂礫が堆積しており、かなりの水量が流れていることがうかがえるため、後に河道となって溝の幅が広がっていることも考えられる。第4発掘区のSD03は幅約0.4m、深さ約0.15mの南北溝で奈良時代の土器が出土した。第5発掘区のSD04は幅約1.2m、深さ約0.2mで、宅地内においては規模の大きな溝であり、宅地の区画に関する造構の可能性がある。六坪の西からおよそ4分の1にあたり、その東に位置するSD05との間が坪内道路として機能していたとも考えられる。両者の溝は出土遺物からも同時期のものと考えられる。土坑SK01・02はともに長辺1m強の平面長方形で、深さ約0.1m。9世紀初めから中頃の土器が出土した。掘立柱の掘形は、切合い関係などから2時期以上に分けられ、東西に並ぶものもあるが、建物としては確認できなかった。溝SD03～05を挟んで東西では柱筋が異なっている。出土遺物は8世紀後半～9世紀中頃の須恵器・土師器が整理箱4箱と若干の瓦片がある。発掘区全体を通して製塙土器の出土が目立つ。

今回の調査では、調査地の制約もあり、十分な造構の確認ができなかったが、四条条間路のすぐそばまで建物がたっていたことや、坪内をさらに区画していた可能性があることなど、条間路沿いの宅地利用の様相の一部を明らかにすることができた。

(松浦五輪美)





第1発掘区全景（西から）



第5発掘区全景（西から）



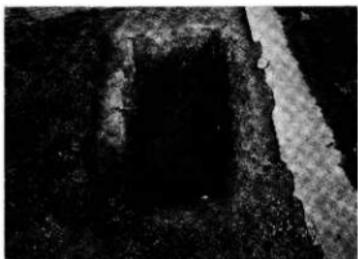
第2発掘区全景（北から）



第6発掘区全景（北から）



第3発掘区全景（西から）



第7発掘区全景（西から）



第4発掘区全景（南から）



第8発掘区全景（西から）

## 8 平城京左京五条五坊七坪の調査 第407次

1 事業名	学校校舎増築
2 届出者名	学校法人奈良整容学園
3 調査次數	平城京第407次調査
4 調査地	奈良市西木辻町57-1
5 調査期間	平成10年8月5日～8月21日
6 調査面積	104m <sup>2</sup>
7 調査担当者	秋山成人



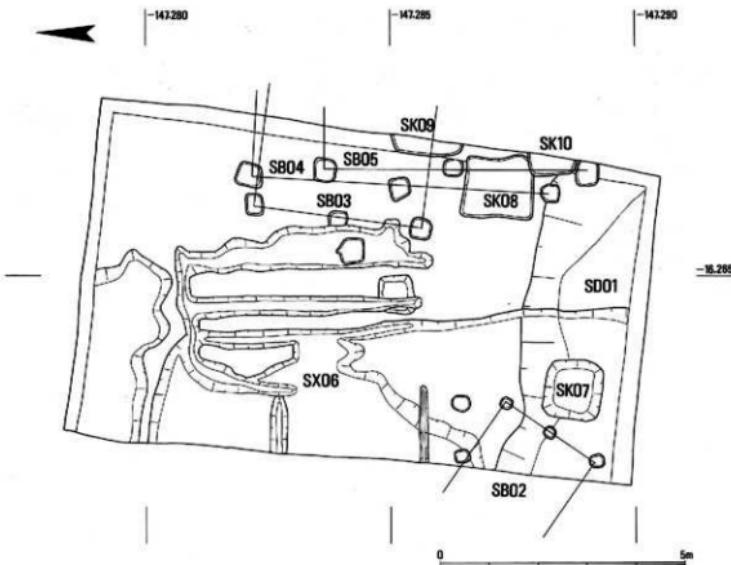
発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原によると左京五条五坊七坪の中央やや南西に相当し、調査地の東で、昭和55年に七坪と十坪を隔てる東五坊坊間路と東西両側溝、奈良時代中頃から平安時代初頭に及ぶ4時期の造構を検出している。今回の調査は七坪の様相を知ることを目的に行なった。発掘区内の基本的な層相は、盛上、黒灰色土（作上）、黄灰色土、淡灰色土、暗灰色砂質土、黄灰色砂質土と続き、地表下2.1mで黄灰色粘砂の地山に至る。造構検出面の標高は66.1mである。

検出造構には、弥生時代の溝（SD01）、奈良時代以前の掘立柱建物（SB02）、奈良・平安時代の掘立柱建物（SB03～05）・溝状造構（SX06）、江戸時代の土坑（SK07～10）がある。SD01は発掘区南辺で検出した南東から北西方向へ続く溝の北肩である。幅3.1m以上、長さ6.4m以上、深さ0.25mで、断面皿状である。埋土は上層から黄灰色土、褐色砂質土である。遺物は褐色砂質土より弥生土器の小片・サヌカイトの小片が出土した。SB02は発掘区南西隅で検出した柱筋が北で西に振れる桁行1間以上、梁間2間の発掘区外西に延びる掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.4m、梁間1.6mである。遺物は出土せず詳しい時期はわからないが重複関係からSX06より古くSD01より新しいことがわかる。SB03は発掘区中央東側で検出した柱筋が北で東に振れる桁行1間以上、梁間2間の東西棟建物の西妻柱列である。柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.8m以上である。SB04は発掘区東辺で検出した柱筋が北で若干東に振れる東西1間以上、南北2間以上の東西棟建物の西妻柱列または南北棟建物の西側柱列である。柱間寸法は東西1.3m以上、南北3mである。SB05は発掘区東壁沿いに検出した東西1間以上、南北2間以上の東西棟建物の西妻柱列または南北棟建物の西側柱列である。柱間寸法は東西0.9m以上、南北2.7mである。SB03～05は重複関係及び柱穴出土の遺物がみられず、詳しい時期はわからないが、昭和55年の調査では奈良・平安時代の建物主軸の振れは東に振れるほど時期が古いとされ、建物SB03～05の時期変遷もSB03、04、05の順に新しくなると考えられる。SX06は発掘区西側で検出した溝状造構である。規模は幅4.8m、長さ10m、深さ0.3mである。埋土は上層から黄褐色土、灰褐色砂質土、黄灰色粘質土、灰褐色粗砂である。遺物は黄褐色土と灰褐色砂質土より8世紀の土器壺・高杯・製塙土器、須恵器壺・壺・鉢・杯が出土した。SK07～10は発掘区南半で検出した平面隅丸方形掘形の土坑である。規模は一辺1.0～1.4m、深さ0.5～0.6mである。埋土は灰褐色土で、17世紀の土器壺・瓦質鉢・陶磁器碗が出土した。

（秋山成人）



遺構平面図（1／100）



発掘区全景（東から）

## 9 J R 奈良駅周辺地区土地区画整理事業に係る調査

奈良市では三条本町所在のJ R 奈良駅周辺で土地区画整理事業を継続して行っている。事業対象面積は23.6haにおよび、全体が奈良時代の平城京・外京の範囲に含まれている。奈良市教育委員会では昭和63年以降当該地の発掘調査を行い、今年度は臨時交付金事業（繰越明許1～3）として左京四条四坊十六坪で2カ所、同四条五坊五坪で2カ所、計4カ所で調査を実施した。調査面積の合計は667m<sup>2</sup>で事業当初からの総調査面積は38,098m<sup>2</sup>に達した。以下、調査の概要を左京四条四坊十六坪と同四条五坊五坪のそれぞれの坪についてまとめて報告する。なお、本文中にあらる遺構番号については各坪ごとに通し番号をつけるという従来の方法に従って付す。

平成10年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧表

調査年度	事業名	調査区・町区	道 路 名	調査 地	調査期間	調査面積	調査担当者
平成10年度	臨時交付金事業（繰越）	408-1発掘区	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町1番地内	H10.08.08～H10.08.25	170m <sup>2</sup>	久保邦
		408-2発掘区	平城京左京四条五坊五坪	三条本町377-1-356-6	H10.09.24～H10.10.21	155m <sup>2</sup>	久保邦
		408-3発掘区	平城京左京四条五坊五坪	三条本町3-21	H10.11.19～H10.12.05	205m <sup>2</sup>	久保邦
		408-4発掘区	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町1-14-16	H10.12.07～H10.12.26	137m <sup>2</sup>	久保邦・安井

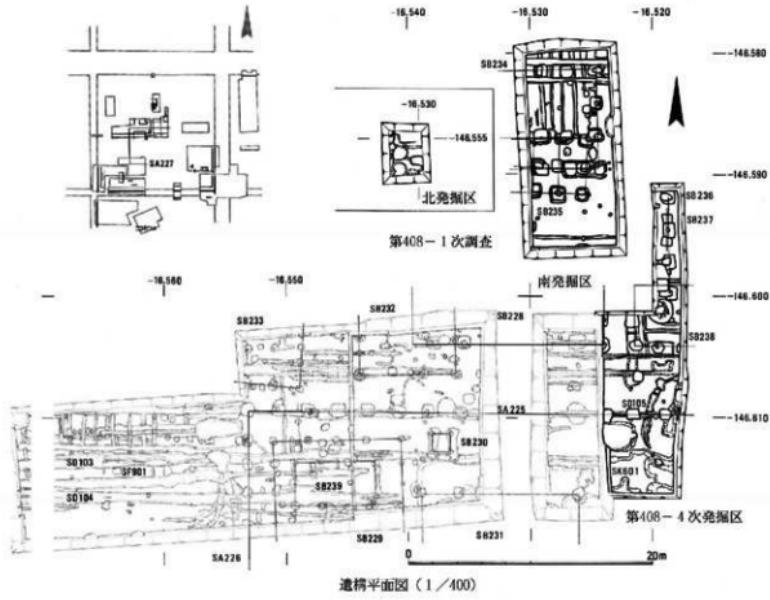


(1) 平城京左京四条四坊十六坪の調査 第408—1・4次

今年度この坪では2箇所の調査を行った。第408—1次調査では坪の中央部や北よりの部分と北端中央部分の各1ヶ所、第408—4次調査では坪のはば中央部で1ヶ所、合計3ヶ所に発掘区を設定した。同坪内では今までの調査で南半についてはかなり様相が明らかになってきている。今回の第408—1次調査はこの坪の北半の遺構の残存状況を明らかにすると同時に、北端で三条大路の南側溝が検出できるように発掘区を設定した。第408—4次調査は昨年度に西隣で行われた市第377—2次調査で検出した遺構の続きを検出することを目的として実施した。<sup>13</sup>なお、本報告ではこれらの3ヶ所の発掘区には北から第408—1次北発掘区、同南発掘区、第408—4次発掘区の名称を用いることとする。

発掘区内の層相は各発掘区において若干異なるが、基本的には上から盛土(0.6~1.0m)、暗灰色または灰色シルトの旧作土(0.2~0.4m)、灰色シルト(0.06~0.2m)と続き、奈良時代の遺構面となる。奈良時代の遺構面の層は基本的には黄褐色シルトであるが、部分的に棕褐色になったり、砂を含む箇所もある。第408-1次南発掘区においては東半~南半にかけて厚さ約0.2mの整地層があり、その上面で遺構を検出している。遺構検出面の標高は、第408-1次北発掘区で63.1~63.2m、同南発掘区で63.2~63.3m、第408-4次調査区で63.4mと、若干南から北に向かって緩やかに傾斜している。

検出した遺構には、奈良～平安時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝、粘土採掘土坑、性格不明の土坑がある。掘立柱建物・塀の規模等については一覧表にまとめた。掘立柱建物 S B 236・S B 237は塀になる可能性もあるがここでは便宜上掘立柱建物としている。以下、発掘区ごとの概要



### 遺構平面図 (1/400)

を報告する。

**第408-1次北発掘区** 条坊の復原では北端で三条大路南側溝が想定される位置に発掘区を設定した。発掘区一面が13~14世紀の粘土採掘坑と思われる土坑によって削平されており、南側溝をはじめ奈良時代の遺構は検出できなかった。

**第408-1次南発掘区** 2棟の掘立柱建物を検出した。

S B234・235 発掘区内で東妻を検出している掘立柱建物。S B234は南面に扉が付き、S B235は総柱建物である。いずれも整地をした後に建てられている。柱穴の遺物はほとんどないが、S B234からは奈良時代後半の土器が出土しており、重複関係からS B235はそれ以前のものであるといえる。

**第408-4次調査区** ここでは掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条検出し、土坑5基、溝1条を検出している。

S A225 市第377-2次調査で検出した東西方向の掘立柱塀である。今回、発掘区南半で新たに2間分検出し、14間以上になることが判明した。西端で南北方向の掘立柱塀S A226と接続し、その南端でまた東西方向の掘立柱塀S A227と接続しており、これら3条の掘立柱塀はコの字形に巡り坪の中央部に区画を形成する。柱穴からの出土土器は奈良時代のものであるが、詳しい時期は不明である。

S B228 市第377-2次調査で検出した掘立柱建物の続きの柱穴を発掘区西端で検出した。さらに東にも柱列は続くが、柱間が西側に続くものと異なるので、北側で柱筋を描える柱穴に続く復元をした。桁行を6間分確認しているが西端の1間分は攢乱で破壊され、桁行7間の建物であつた可能性が高い。柱穴からは時期の判明する遺物が出土しなかった。

S D105 発掘区南東部で検出した半円形に巡る溝である。幅0.7m、深さは残りのよい部分で0.1m、直径は約10mに復原できる。切り合い関係から検出遺構の中で最も古くなるが、土器の小片が僅かに出土しただけで、時期不明である。

S K601 市第377-1次発掘区東南隅で検出し、今回発掘区南端で検出した土坑状の遺構。東西長20m以上にもなる大型のもので、検出面からの深さ0.5mである。出土遺物は、奈良時代のものと分かるものが多いが、前回の調査では平安時代前期の遺物も出土している。

**出土遺物** 非常に少なく3ヶ所の発掘区で遺物修理箱6箱分のみであった。瓦類は丸瓦・平瓦がわずかに出土しているが時期のわかるものはなかった。上器類は、第408-1次南発掘区、第408-4次発掘区の遺物に関しては時期不明の小片が多く、時期の判明するものは奈良時代後半~平安時代にかけてのものがほとんどである。第408-1次北発掘区で検出した粘土採掘坑から13世紀後半~14世紀の土器が出土している。

掘立柱建物・界・塀表

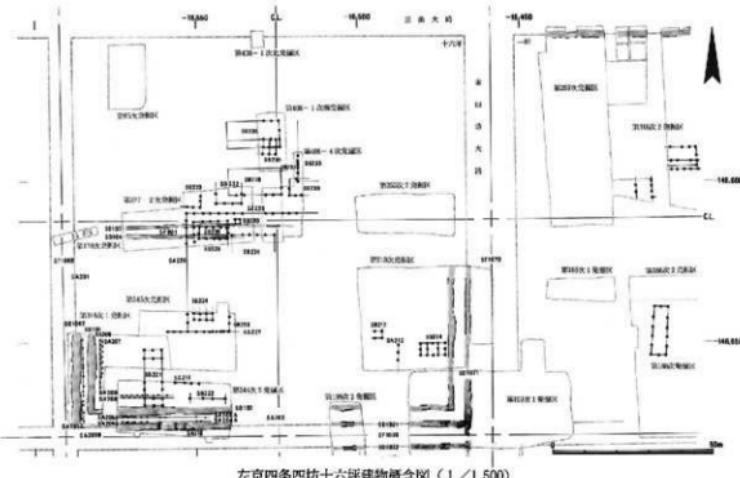
遺構番号	概方向	規模 (桁行×梁間)	相行全長 m (尺)	梁間余長 m (尺)	桁柱間寸法 m (尺)	梁間柱間寸法 m (尺)	扇の出 m (尺)	備考
S A225	東西	14以上	34.1 (115) 以上		2.4 (8)			市第377-2次調査の 続き
S B228	東西	6以上	14.1 (47) 以上	2.1 (7) 以上	2.4 (8) [東端2.1 (7)]	2.1 (7)		市第377-2次調査の 続き・桁行は7 間の可能性あり
S B234	東西	3以上×2	4.8 (16) 以上	5.4 (18)	2.4 (8)	2.7 (9)	2.7 (9)	S B235より新しい 両柱付建物
S B235	東西	3以上×2	4.8 (16) 以上	4.8 (16)	2.4 (8)	2.4 (8)		總柱建物
S B236	?	3以上		8.1 (27)		2.7 (9)		S B235より古い
S B237	?	2以上		1.8 (6) 以上		1.8 (6)		S B236より古い
S B238	東西	2以上×2	4.2 (14) 以上	5.4 (18)	2.1 (7)	2.7 (9)		S B235より新しい

**まとめ** 十六坪内の奈良時代における宅地利用の変遷については現在検討中であるが、出土遺物が少なく、未発掘部分も多く残りかなり困難である。遺構の切り合い関係、建物配置、坪内道路の存在から少なくとも3時期以上の変遷が考えられる。

先ず、一番古いのは、掘立柱壻 S A225・S A226・S A227によって囲まれる区画が坪の中心に存在する時期である。これらの掘立柱壻が、坪の東西・南北の中心線をまたいで存在することから、この区画があった時期は一坪利用であったと考えられる。この区画内には、掘立柱建物 S B229・S B231があるが、位置的に同時に存在することは考えられず、少なくとも区画のなかで2時期以上ある。なお、S B231については、坪の中心からは西にずれるものの、建物の中心が S A226から70尺（=小尺、以下同じ）の位置にあり、S B231と S A226が、同時に存在していた蓋然性が高い。S A225・S A227については、西端の柱穴心から坪の（側溝心々距離）の中心までの距離が87.5尺で、中心で折り返すと東西方向175尺に復原できる。仮にその値で復原した場合、中央の区画部分とその西と東の復原築地心までの距離がいずれも110尺であることから上記の復原は妥当であるといえよう。因みに S A225から坪北辺の推定築地心までの距離は175尺、S A227から坪南辺同ラインまでの距離は90尺で、計画的な造営であることがわかる。

次に、坪が東西方向の坪内道路 S F901によって南北に分断され、坪が1/2の宅地利用になる時期がある。この坪内道路の中心は、坪をはさむ北と南の道路心間の中心ではなく十六坪側の道路側溝の心々距離の1/2のラインを通っていることが判明した。坪内道路の南・北側溝 S D103・S D104の埋土からは、奈良時代末の土器が出土していることから、S F901が機能しているのは奈良時代末までで、それより新しい掘立柱建物 S B230は平安時代のものである可能性が考えられる。なお、坪の北半分の宅地については東西の中心ライン付近で東西に区画する遺構はなく、1/2坪以下には細分されていないことが分かる。

以上、十六坪で今までのところ判明していることについて概観した。これ以外に、建物の柱穴からの出土遺物や、建物の振れによって建物配置の変遷を検討したが、現在までのところ、同時



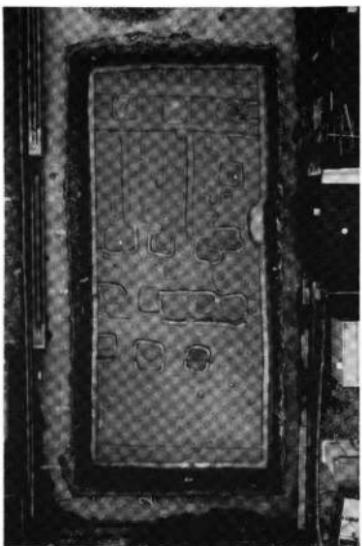
期の建物の組み合わせを明確にすることはできない。だが、一坪利用から1/2坪利用の移り変わり、中心部に位置する区画の存在が明らかになり、道路心ではなく、側溝心々・築地の中心ラインを基準とした造営計画であったことが判明した。

今回の調査では第408-1次北発掘区での検出が期待された三条大路の南側溝が、後世の粘土探掘坑により削平されているという残念な結果となった。この坪では北辺を限る側溝及び雨落溝だけが未検出であることから、今後の調査でこれらを検出し、坪の四至を確定することによってより信頼性のにおける坪内造営計画の復原・建物配置の変遷を明らかにする必要がある。

さて、この坪が含まれる左京四条四坊は、墓誌によって太朝臣安萬呂が居住していたことが知られている。彼は、従四位下という身分からおそらく一坪利用の宅地に住んでいたと推定される。太安萬呂は723年に没していることから、彼の宅地であるとするなら出土遺物に奈良時代前半の出土遺物が予測されるが、先述のとおり、十六坪では、奈良時代後半以降の土器しか出土しておらずその点からは可能性が高いとは言い難い。一方、今までの同坊内の調査では、坪利用の状況がかなり明らかになってきている。十五坪において行われた市第234次・市第253次1・3発掘区・市第325次6・7発掘区・市第347次1発掘区の調査結果からこの坪が一時期一坪利用であった可能性があるという指摘がある。<sup>1)</sup>この例の他は確実に一坪利用宅地の例がないだけに、出土遺物の問題もあるがこの十六坪は非常に重要な事例であるといえよう。

(久保邦江)

- 1)「平城京左京四条四坊十六坪の廣査第377-2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度』 奈良市教育委員会 1998  
2)「平城京左京四条四坊十五坪の廣査 第318-1・3、325-2~7、347-1」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成8年度』 奈良市教育委員会 1997



第408-1次調査南発掘区（上が北）



第408-1次北発掘区（上が北）



第408-4次発掘区（上が南）

## (2) 平城京左京四条五坊の調査 第408-2・3次調査

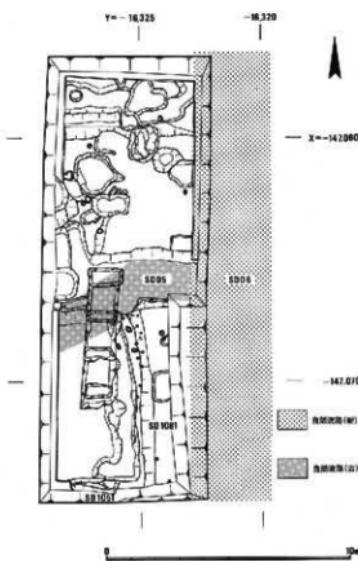
左京四条五坊内では今までに3度調査が行われている。それらの調査では弥生時代後期～古墳時代初頭と奈良時代以降の自然流路、中～近世の粘土探掘坑と考えられる土坑等を検出している。弥生時代後期～古墳時代初頭の流路からは土器が良好な状態で出土しているため、近隣にその時代の集落がある可能性が高いが発掘区内では住居跡等の遺構は確認していない。また、確実に奈良時代のものと考えられる遺構も検出していない。今年度は同坪内で2カ所の調査を行った。調査地が離れ遺構の関連性が少ないので、それぞれの調査ごとに報告する。

**第408-2次調査** 調査地は坪の南西隅に位置し、四条大路北側溝と四・五坪坪境小路西側溝が想定される位置にある。

発掘区内の層相は基本的に上から盛土(0.8～1.1m)、暗灰色粘質土の旧作土(0.1～0.2m)、灰色土(0.2m)、灰褐色土(0.1～0.2m)と続き、標高約65.2～65.3mで黄褐色シルトの奈良時代の遺構面に達する。

検出した遺構は奈良時代の左京四条五坊四・五坪坪境小路東側溝、粘土探掘坑と考えられる土坑である。その他、弥生時代後期～古墳時代初頭の自然流路、奈良時代以降の自然流路を検出している。以下、主な遺構について報告する。

S D1081 四・五坪坪境小路西側溝と考えられる南北方向の溝である。西肩から幅約1.3m分、長さ7m分、深さ0.5mまでを検出した。北は後世の粘土探掘坑で削平され、南は発掘区外南に続く。東肩を検出すべく東側に拡張し確認したが、この溝と平行して自然流路が南北方向にあり、



遺構平面図 (1/200)



発掘区全景（上が南）



発掘区全景（上が北）

これによって削平されていることが明らかになった。埋土は上下2層に分かれ遺物はその上層もしくは層の境界から多く出土した。出土遺物は8世紀後半～10世紀後半の土師器・須恵器である。壺の底に穿孔がある土器も出土し、祭祀を行った可能性もある。

S D05 発掘区中央部で検出した東西方向の自然流路である。上部は粘土探査坑によって削平されており、幅1.3m、深さ0.3mまでを確認している。出土遺物は少なく、弥生時代の土器類がほとんどであるが、古墳時代の布留式土器と考えられる土器片がわずかに含まれていた。

S D06 発掘区東壁・東南隅拡張部で確認した南北方向の自然流路である。坪塙小路西側溝S D1081を壊していることから10世紀後半以降の流路と考えられる。出土遺物はS D1081のものと同時期の土器であり、同溝からの混入の可能性が高い。

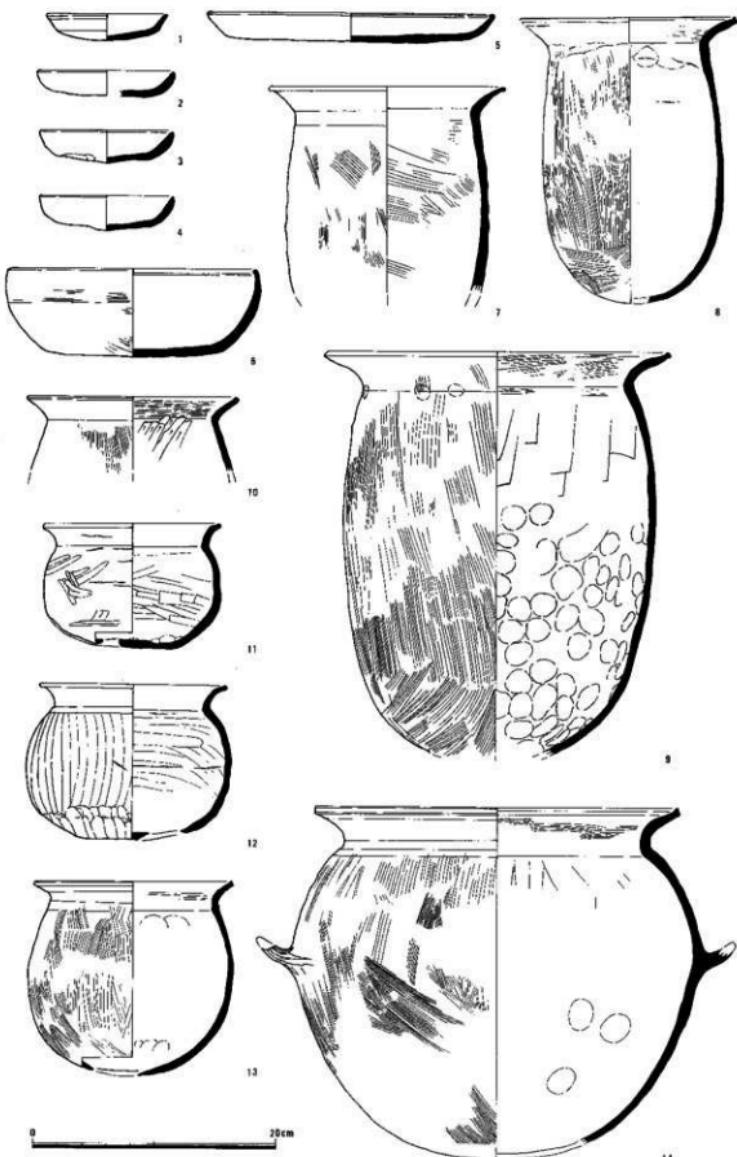
その他、発掘区全体で粘土探査坑と考えられる土坑を多数検出している。平面形態・規模から大きく2タイプに分けられる。最大径2m以下の平面不整円形若しくは、隅丸方形のものと、長辺4m以上の隅丸方形のものである。出土遺物から前者が16世紀～17世紀のものが中心で、後者は、時期の分かるものが少ないが、若干古くなる傾向があることが分かる。検査面からの深さは、両者とも0.4m程度で、採取目的の粘土の堆積層の厚さに起因していると考えられる。

以上のように、当調査区では周辺の調査と、同様2時期の自然流路と、粘土探査坑らしき土坑を検出した。新たな成果としては坪塙小路の側溝と考えられる溝を検出したことがある。平成8年度に約40m北で実施した第373次調査ではこの溝は検出しておらず、発掘区外西になるという見解であった。今回の調査により、坪塙小路西側溝は、第373次調査発掘区外東側に位置した可能性が高くなった。四条大路の北側溝は検査できず、発掘区外南に位置することが判かった。(久保邦江)

**出土遺物** 出土遺物は遺物整理箱で6箱分出土した。出土した遺物は瓦類・土器類である。瓦類は丸瓦・平瓦が数点出土したのみで、大半が上器類である。土器類は、奈良時代～平安時代の土師器・須恵器がほとんどで、粘土探査坑から出土した中近世の土師器・須恵器が少量、S D05から出土した弥生時代V様式の壺や壺の破片が数点ある程度である。ここではまとめて出土したS D1081の土器類について概要を報告する。

大半は、土師器の壺類である。食器類には、土師器皿C(1～4)、土師器皿A(5)がある。いずれも器表面の摩滅が著しく、調整は不詳。ただし、土師器皿Aは、ところどころ胎土中の砂粒が動いた痕跡が見られ、C手法で調整された可能性がある。また、底部外面に木の葉の痕跡が消されずに残っている部分がある。1～5は、南都土器編年I期中～新段階(8世紀末～9世紀中頃)のものであろう。6は土師器平鉢で8世紀代のものと考えられる。土師器皿(7～14)には短胴(11～14)と長胴(7～10)のものがある。7～9の胎部外面は、いずれもハケメ調整である。8の体部内面は、摩耗のため工具の単位が判らないが、縦方向のヘラケズリで調整されているようである。9は底部から体部半ばまでの内面に、タキのあて具痕跡と見られる凹凸が残る。10はU縁部から体部半ばまでの破片だが、中胴が長胴の壺になると考えられる。体部内面はヘラケズリされている。11～13は底部が穿孔されている。11の胴部は外面上半を斜め方向に、内面を横方向に指ナデで調整しており、底部外面には一部にヘラケズリ痕跡がのこる。12の胴部は外面上半を縦方向に、内面を横方向に指ナデで調整している。また底部外面の周囲にリング状の圧痕があり、製作時に器台として利用された杯や皿などの痕跡と考えられる。11・12は、底部が平底気味で、形態的特徴・調整手法において平城京で一般的に見られる「都城形」壺とは異なる。祭祀等、特別な用途を考える必要があろうか。他に、南都土器編年III期(10世紀後半)の土師器高台付皿の小破片がある。須恵器は壺類が僅かにあるだけである。

(大庭淳司)



溝 S D1081出土上器 (1/4)

408-3 次調査 調査地は坪の中央部やや南西よりの位置にある。ここから約50m南西の位置で平成8年度に第373次調査を実施した。<sup>1)</sup>その際、発掘区の北半分が自然流路であり、位置的に今回の敷地の南半は自然流路で削平されている可能性が高かった。そのため今回の調査に際しては、できるだけ発掘区を北側によせて設定した。

発掘区内の基本的な層相は、盛土(1.2m)、濃灰色土(0.1~0.6m)、灰色砂質土・礫混(0.2~0.3m)、淡灰色若しくは灰色粘土で、地表面下約1.5~1.6mで淡黄褐色シルトの奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は概ね64.9mである。

検出した遺構は、自然流路と東西方向の溝で、予想どおり発掘区南半の遺構面は流路によって削平されていた。

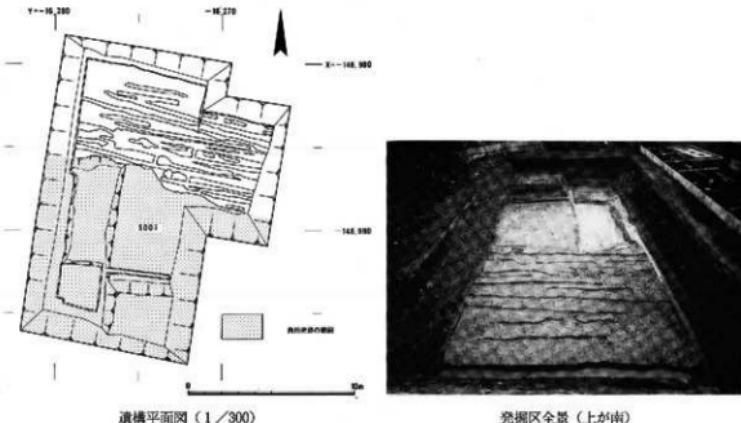
S D07 発掘区南半で検出した東西方向の自然流路である。北側のみを検出し、南側は発掘区外南にある。幅10m以上、検出面からの深さ0.4m以上、北側の汀を長さ11m分確認している。埋土は、淡灰色細砂・灰色中粒砂・灰色粗砂・小礫などの層がレンズ状に堆積し、部分的に灰色シルト・細砂が細かい単位で互層に堆積している。出土遺物は古墳時代の遺物が僅かに含まれている他は、9世紀後半~10世紀初頭の土器である。この流路の北西の位置に当たる市第268次調査<sup>2)</sup>のS D04と、南西の市第373次調査のS D02は今回検出したS D07と同様の自然流路である。溝は、方眼方位に対し、西側で北に15°程振れて並んでいる。S D07の汀線も同様に振れ、また先述の市第268次調査の南発掘区で検出した溝も同様の振れであった。これらの溝が流路によって形成された地形に規制され、その結果方眼方位に対して振れるのであれば北西の位置にあるS D04に続くと考え方が妥当であるが、溝からの出土遺物は少なく、ほとんどが小片であるため、遺構の時期は不明で、今回検出のS D07がS D02・S D04のどちらに接続するかは判断できない。

今回の調査の結果、五坪内での他の調査の結果同様に自然流路を検出した。一方、周辺で多く確認されている粘土探掲坑はまったくなかった。これは探掲されている粘土と考えられる淡黄褐色シルト層の堆積が薄く、粘土探掘に不適切であるからだと考えられる。

(久保邦江)

1)「平城京左京四条五坊五坪の調査 第373次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度』奈良市教育委員会 1998

2)「平城京左京四条五坊五・六坪の調査 第268次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』奈良市教育委員会 1993



## 10 平城京左京一条七坊六坪の調査 第409次

- 1 事業名 若草公民館建設事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第409次調査
- 4 所在地 奈良市川上町575番地
- 5 調査期間 平成10年8月18日～8月21日
- 6 調査面積 39m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 安井宣也



発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復原では左京一条七坊六坪の北西辺にあたる。地形的には南北を段丘に挟まれた佐保川の谷底低地にあたり、北側を現在の佐保川が西流する。

平成3年度に調査地西側で宅地造成に伴い実施した試掘91-15次調査では、作上（厚さ0.2m）、作上下層土および後背湿地の堆積層（厚さ0.4～1m）の下に砂礫の堆積層が確認され、後背湿地の堆積層の最下位から鎌倉時代の土器片が出土した。

今回の調査では、東西5.6m×南北7mの発掘区を設定し、現地表下2.8mまで掘削した。層相は公民館建設に伴う盛土（厚さ1.5m）の下に作土（厚さ0.2m）、2層の泥質の作土下層土（厚さ0.4m）があり、砂礫の堆積層となる。砂礫の堆積層の上面で江戸時代後期の土器片が出土したことから、調査地における水田開発の上限はこの時期に下る可能性がある。  
（安井宣也）

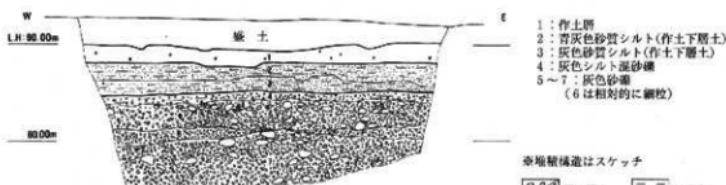
（註）奈良市教育委員会「小規模確認調査・試掘調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』（1992）



発掘区全景（北西から）



発掘区東隅土層堆積状況（南から）



発掘区北壁土層断面図 (1/50, テラス以下の状況)

## 11 平城京東四坊大路の調査 第410次

- 1 事業名 芝辻大森線街路整備都市再開発  
関連促進事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第410次調査
- 4 調査地 奈良市大宮町二丁目134-3・4
- 5 調査期間 平成10年8月20日～9月9日
- 6 調査面積 100m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 大庭淳司



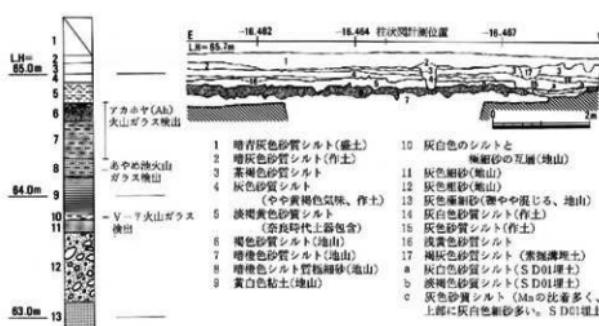
発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

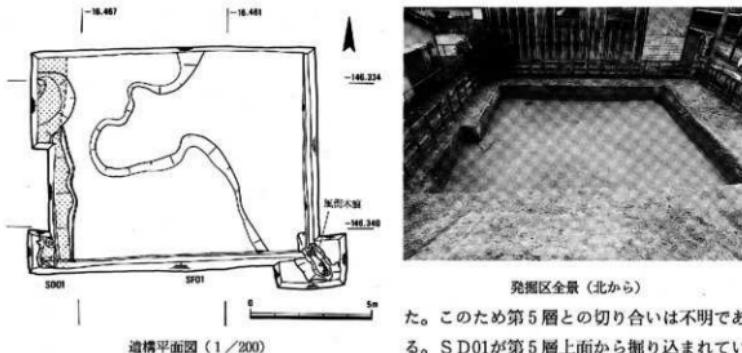
調査地は、平城京の条坊復原では左京三条東四坊大路に相当し、条坊造構の検出を主目的として発掘調査を実施した。発掘区の層相は柱状図に示すとおり、盛土以下、作土が0.2～0.3m続き、現地表面下約0.5mで奈良時代の土器を包含する淡褐色黃色砂質シルト（第5層）、約0.7mで褐色砂質シルト（第6層）の地山となる。第6層は根による攪乱のため層界が安定しない。<sup>1)</sup>地山の標高は64.7～64.9mである。近隣の調査例と対比すると、第6層は左京三条五坊三坪の調査の黄褐色～暗茶褐色土層（上面で奈良時代の掘立柱建物・時期不明の堅穴式住居・河川・繩紋時代後期の土坑が検出された）に対応すると考えられる。造構検出は、第6層及び暗橙色砂質シルト（第7層）上面で行った。

検出した造構には、東四坊大路S F01とその西側溝と考えられる溝SD01がある。また風倒木痕を1箇所検出した。SD01は幅約1.30m、深さ約0.15m。埋土から奈良時代のものと思われるロクロ成形の土師質の土器が出土している。SD01溝心の国土座標は、X = -146,845.700m、Y = -16,468.100m。市第377-1次調査<sup>2)</sup>で検出した東四坊大路西側溝心がX = -146,827.500m、Y = -16,465.500mであるから、朱雀大路の国上方眼方位に対する振れ (N0°15'41"W) を考慮

すると、SD01溝心は0.3m西にずれる程度であり、SD01を東四坊大路西側溝と考えてまったく無理がない。ただし、SD01は水田造成による削平が著しく、一部を第6層上面、大半を第7層上面で検出し



上層柱状図 (1/40)・南壁土層断面図 (1/100)



るとすれば、第5層は奈良時代整地層であり、東西坊大路路面は一定量の土が入れられ整地されていたことになる。

風倒木痕は第6層上面で検出した。長さ2.5m以上、幅約1.2m、深さ約0.3m。出土遺物はなく、時期不明。

下層遺構の有無を確認するため、第6層上面より約1.9m掘り下げたが、遺構はなかった。概ね標高63.8m以下は砂礫層が続く様相である。また南壁面の柱状図計測位置において第6層以下灰白色のシルトと極細砂の互層（第10層）まで12点の分析用資料を採取し、火山ガラス分析を行なった。その結果、いずれも下位の地層から二次的に堆積したものではあるが、8資料中から火山ガラスが検出された。第6・7層からは安定してアカホヤ(Ah)火山ガラスが検出され、始良(AT)火山ガラス・同定できない複数の火山ガラスがこれに伴う。暗橙色シルト質極細砂（第8層）以下ではアカホヤ(Ah)・始良(AT)火山ガラスが共に見られず、様々な火山ガラスが混在して検出された。以上のことから、第6・7層はアカホヤ(Ah)火山灰降灰以降、第8層以下の層は始良(AT)火山灰降灰以前の堆積とみられる。ただし、第10層からV-7火山灰と同定できる火山ガラスが検出されるため、V-7火山灰降灰(c.a.85~105ka)以後に限られる。（大窪淳司）

**出土遺物** 出土遺物は土器類のみで、土師器、須恵器があるが時期のわかるものは少ない。ここでは、SD01から出土したロクロ成形の土師質の土器を取り上げる。古墳時代の須恵器の杯蓋を逆さにしたような形をしているが、底部は平らである。



溝SD01出土土器 (1/4)

底部から口縁部の立ち上がりは丸みを帯びる。口縁部外面下半から底部外面はロクロケズリで調整する。口縁部内面上半はロクロ成形にしては凹凸が少なく、ヨコナデのようにナデを上方に抜いた痕跡が見られる。口縁部外面上半、底部内面は器面が剥離して調整不明である。焼成は軟質である。調整や器形から土師器、須恵器のどちらとも決め難いので、今回はロクロ成形の土師質土器として報告する。ロクロ成形の土師器は、京内の出土例も見られるが、今回出土したものは、今までに類例のない器形である。共伴した遺物には、奈良時代のものと思われる土師器の壺、須恵器の杯または皿、甕があり、この土器も同時期のものである可能性がある。今後は、ロクロ成形の土師器または土師質土器の見られる地域との関係から、その時期などについて検討していく必要がある。（細川富貴子）

1) 宮原晋一「左京三条五坊三坪の調査」『奈良県遺跡調査概報(第一分冊) 1996年度』1996

2) 奈良市教育委員会「東西坊大路の調査 第377-1次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書(第1分冊) 平成9年度』1998

## 12 平城京左京四条四坊二坪の調査 第411次

- 1 事業名 共同住宅建設
- 2 届出者名 松田長昌
- 3 調査次数 平城京第411次調査
- 4 調査地 奈良市三条添川町214
- 5 調査期間 平成10年10月5日～11月9日
- 6 調査面積 240m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 秋山成人



発掘区位置図 (1 / 6,000)

### 8 調査概要

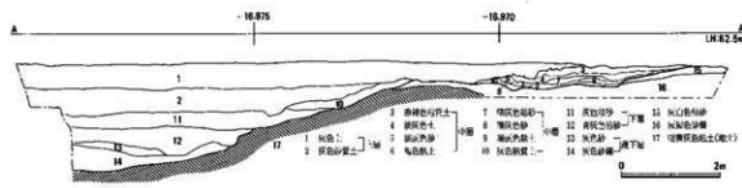
調査地は、平城京の条坊復原によると左京四条四坊二坪の西辺中央に相当する。調査地の北隣接地では平成6年度に奈良市教育委員会が平城京第290次調査を行い、奈良・平安時代の掘立柱建物・塀・井戸・土坑、鎌倉時代の流路・溝を検出している。今回の調査は二坪の様相を知ることを目的に行なった。発掘区内の基本的な層相は、盛土、黒灰色土（作土）、暗黄灰色土上、淡黄灰色砂質土上、黄褐色土上、茶褐色砂質土（整地上）、黄灰色砂質土、灰色砂礫、暗黄灰色粘土（地山）である。遺構は発掘区北側に堆積する茶褐色砂質土（整地上）と発掘区南側に堆積する暗黄灰色粘土（地山）上面で検出した。遺構検出面の標高は62.1mである。

検出した主な遺構には、縄紋時代の自然流路（S D01）、奈良時代の井戸（S E02）・掘立柱建物（S B03）・掘立柱列（S A04・07）・溝（S D05）・土坑（S K06・08）、奈良時代から平安・鎌倉時代にいたる溝（S D09）がある。

S D01 発掘区東半で検出した北東から北西方向へ蛇行する流路の南岸部分である。幅8m以上、深さ0.5m以上である。埋土は上層から灰白色粘土、灰褐色砂礫である。遺物は灰褐色砂礫から縄紋時代晩期の深鉢・サヌカイト製石器の剥片が出土した。

S E02 発掘区北壁沿いで検出した平面隅丸方形掘の井戸である。規模は東西3.7m、南北2.2m以上、検出面からの深さ2.76mである。井戸枠は方形横板組隅柱横桟留で、内法1.05である枠上部は抜取られている。枠内埋土は灰色土で、最下層から8世紀前半の上師器杯・甕、須恵器杯・壺の小片が出土した。重複関係からS A04より古いことがわかる。

S B03 発掘区北東隅で検出した東西2間、南北2間以上の発掘区外北側に延びる縦柱建物、



溝 S D09土層図 (1 / 100)

柱間寸法は1.95m等間、南北1.65mである。柱掘形から8世紀の土師器小片・須恵器甕が出土した。

S A04 発掘区中央北よりで検出した東西3間以上の掘立柱列で、建物S B03の南側柱列に並ぶ柱間寸法は2.1m等間である。柱掘形から8世紀の土師器甕・須恵器杯蓋・壺が出土した。

S D05 発掘区東半で検出した東西方向の溝で幅は2.8m～5.0m、長さ8.3m以上、深さ0.4mで断面逆台形をなす。埋土は茶灰色土で8世紀の土師器皿・杯・壺・甕・製塙土器・須恵器皿・杯・壺・鉢・甕・平瓦が出土した。

S K06 発掘区北壁沿いで検出した平面不整形な土坑である。規模は東西1.7m、南北1.0m以上深さ0.49mである。埋土は上層から褐灰色砂質土・褐灰色粘質土・褐灰色粘土である。遺物には褐灰色粘質土出土の8世紀の土師器皿・須恵器平瓶・褐灰色粘土出土の土師器甕がある。

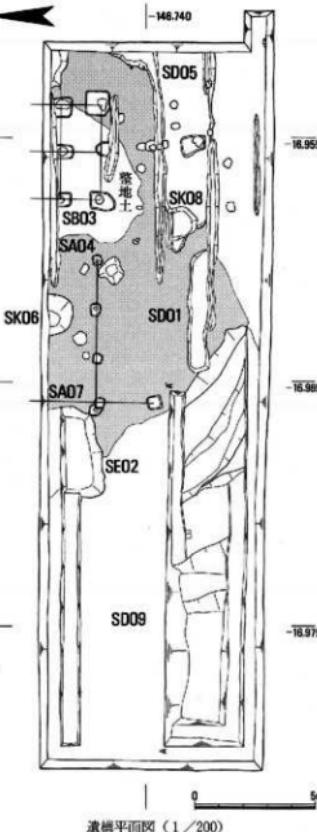
S A07 発掘区中央で検出した南北1間以上の掘立柱列である。柱間寸法は2.25mである。遺物が出土せず詳しい時期はわからないが重複関係からS A04より新しいことがわかる。この柱列は第290次調査検出の坪S A06につながる一連のものと考えられる。

S K08 発掘区東半で検出した平面不整形な土坑である。規模は東西1.3m、南北1.0m以上である。埋土は灰褐色土(炭化)で、8世紀の土師器皿・杯・高杯・製塙土器・小壺・須恵器杯・壺・鉢・甕が出土した。重複関係から溝S D05より新しいことがわかる。

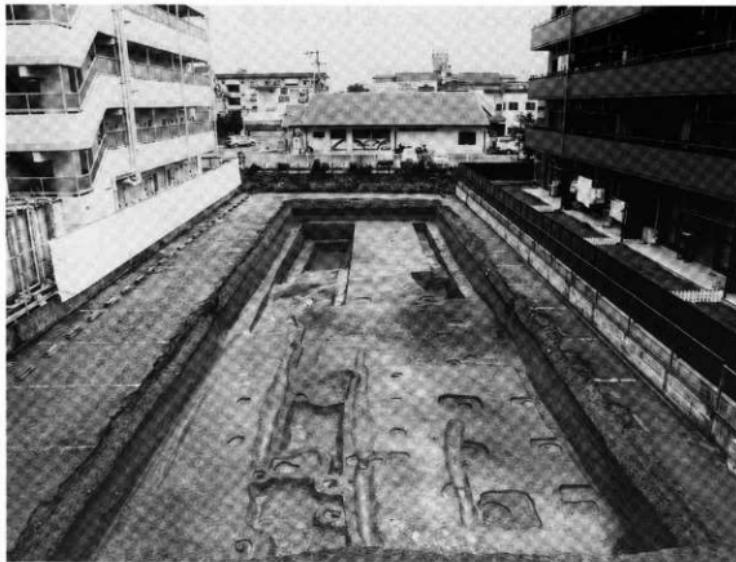
S D09 発掘区西半で検出した南北方向の溝の東半部分で、東岸は一時溢れたらしく南東方向へ浅く拡がる。幅13.8m以上、長さ8.5m以上、深さ2.2mである。埋土は灰色系の粘土と砂が互層に堆積し、最下層の灰色砂礫から8世紀から9世紀の土師器皿・杯・須恵器甕・上層の灰色砂質土から12世紀末の瓦器碗が出土した。この溝は第290次調査で検出した流路S D10につながる。

今回の調査では、溝S D09上層埋土が井戸S E02を覆うとともに、溝S D09最深部の検出位置が東三坊大路東側溝の復原位置にほぼ一致することから溝S D09は奈良時代当初の東三坊大路東側溝が平安時代末・鎌倉時代初めに完全に埋まるまで溢れながらも流れていたと考えられる。そしてこれまで柱列S A07(第290次調査坪S A06)が坪の西辺を画する施設と思われていたが、さらに西側において井戸S E02を検出したことで、坪の西辺は新たに西側に拡がることがわかった。また溝S D05は坪の南北二等分線付近に位置し、これを境に北に建物S B03・柱列S A04が配置されており、坪が分割利用されていたことが窺える。

(秋山成人)



遺構平面図(1/200)



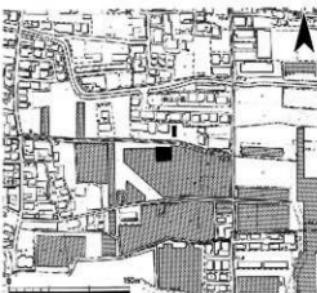
発掘区全景（東から）



S D09土層堆積状況（南西から）

### 13 平城京右京二条三坊七坪の調査 第412次

- 1 事業名 近鉄西大寺駅南土地区画整理  
促進事業
- 2 通知者名 奈良市長 西田栄三
- 3 調査次数 平城京第412次調査
- 4 調査地 奈良市青野町36-1・2,2108-1
- 5 調査期間 平成10年9月28日～10月30日
- 6 調査面積 北発掘区18m<sup>2</sup>、南発掘区474m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 鐘方正樹



発掘区位置図 (1/6,000)

#### 8 調査概要

調査地は平城京右京二条三坊七坪内の北辺中央付近に位置し、現行道路を挟んで南北に発掘区を設定した。なお南発掘区は、昨年度に実施した第378-5次調査地内の未発掘部分に相当する。

**北発掘区** 昭和50年代に盛土（厚さ約1m）を入れて、湿地を畑地に変えている。この盛土の下に作土、灰色砂質土、暗青灰色粘土、淡灰色粘土、淡灰色土、灰色土と堆積層が続く。現地表から約3.3mの深さまで掘削したが遺構面ではなく、北発掘区は旧流路中に相当する。

**南発掘区** 遺構面（地山上面）は南西側が高く（標高70.5m前後）、北側を東流する旧流路に向かって緩やかに下がっている。北東側での標高は70.2m前後である。第378-5次調査の成果と整合させることにより、掘立柱建物5棟、掘立柱列4条、井戸2基、土坑などを確認した。なお、発掘区東側の一部で地下げの範囲を確認したが、完掘できなかった。

昨年度報告の中で、訂正等が必要な遺構がある。S B296は妻柱を確認できないものの2×3間の東西棟建物、S B348は柱列（S A348）と報告した遺構が2×3間の東西棟建物と判明したもの、S B300は規模が2×3間と判明した東西棟建物である。S B300はS A355と柱筋を揃えるので奈良～平安時代の遺構と考えられ、S B299は誤りで存在しない。

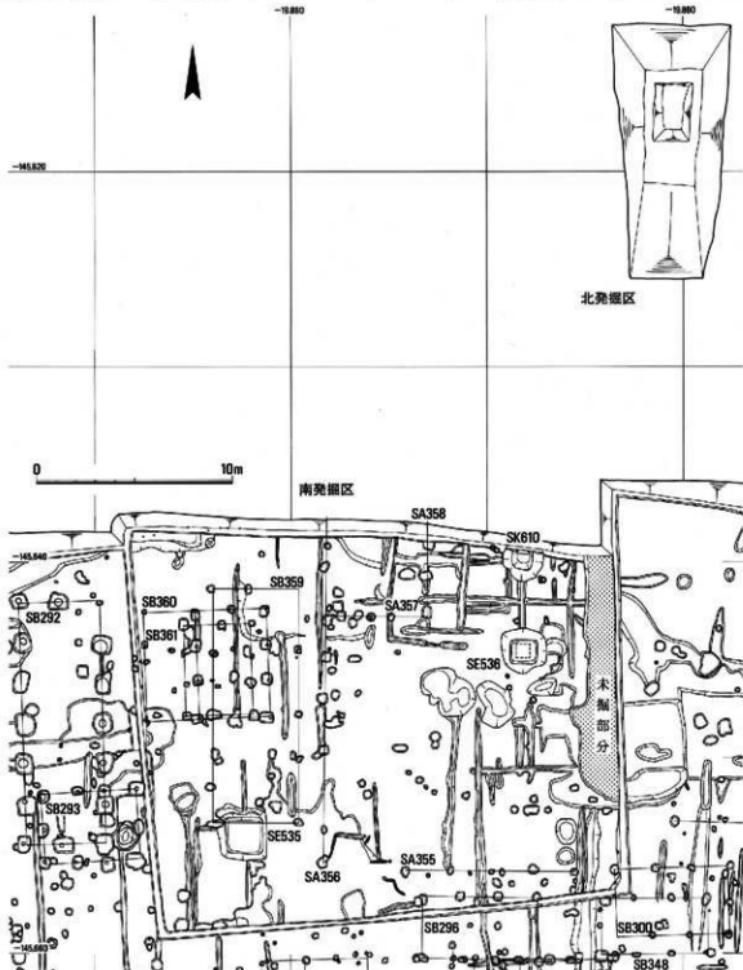


北発掘区全景（北から）



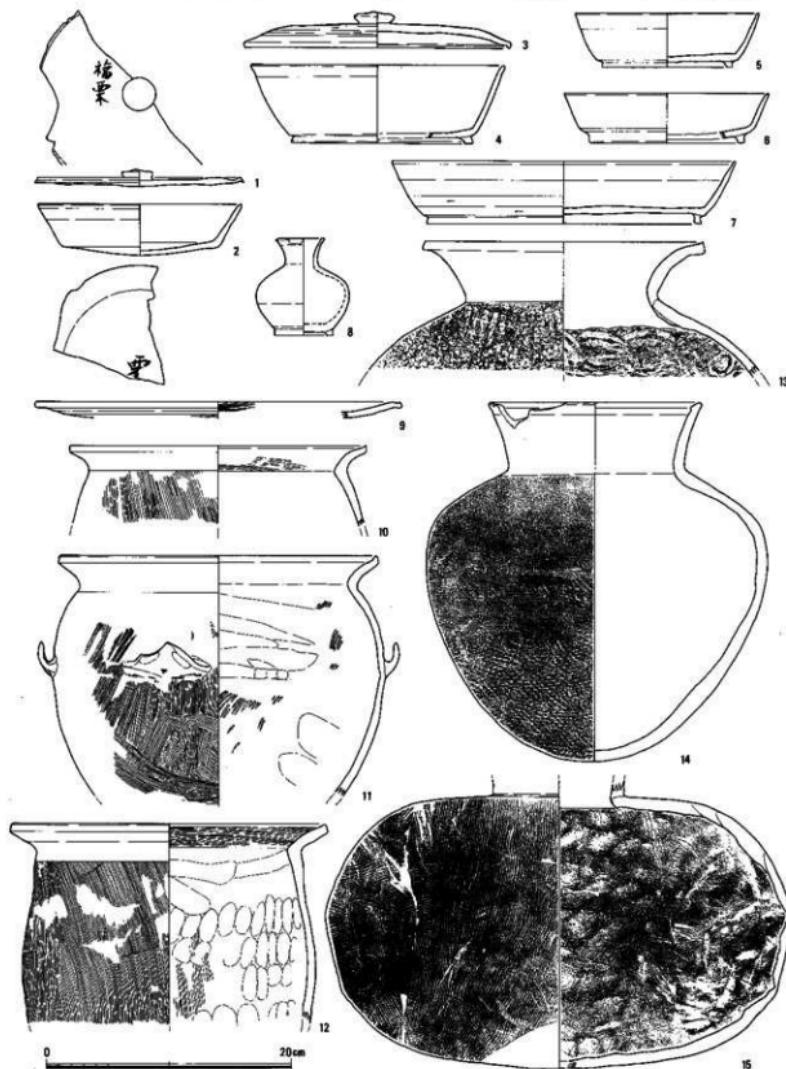
南発掘区全景（南から）

次に、今回の調査で新しく確認した遺構について述べる。S A355は坪内の南北1/4、S A356は坪内の東西1/3付近に位置するので、宅地を分ける区画施設であった可能性が高い。S A356の西側では3棟の掘立柱建物を複数する位置で確認した。S E535・536は、共に井戸枠を抜き取られるが、後者の底には内法一辺72cm前後の方形井戸枠痕跡が認められ礫が散在していた。井戸の深さは、前者が約1.4m、後者が約1.1mである。S K610は、深さ約2mの土坑である。枠を設置した痕跡がなく、湧水層にまで達している。およそ2/3が自然堆積した後に上部を埋め立



第412次遺構平面図 (1/250)

てるが、その面から須恵器壺1点(14)が出土した。また、底から多くの土器、瓦と横櫛片1点が出土している。その中にはSE536出土土器と接合するもの(12)があり、両遺構は同時期に併存していた可能性が高い。SE536からは軒平瓦6641Cが1点出土している。(鐘方正樹)



土坑S K610出土土器(1/4)

## 14 平城京左京三条四坊十二坪の調査 第413次

- 1 事業名 共同住宅建設  
 2 届出者 大和ハウス工業株式会社  
 3 調査次数 平城京第413次調査  
 4 調査地 奈良市大宮町二丁目98-7  
 5 調査期間 平成10年10月26日～11月26日  
 6 調査面積 366m<sup>2</sup>  
 7 調査担当者 中島和彦



発掘区位置図 (1/6,000)

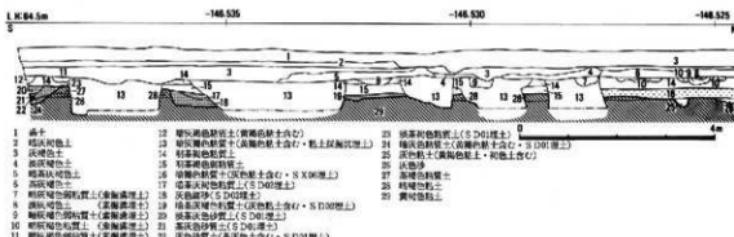
### 8 調査概要

調査地は十二坪の南東辺にある。今回の調査地の北側では、1986年に奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が行われている。この調査では奈良時代の掘立柱建物と井戸などを検出しており、十二坪が奈良時代を通して宅地として利用されていたこと、宅地には大きく3時期の変遷があり、いずれも十二坪の全体をまたは半分を一体として利用していることが明らかになった。

調査地は発掘調査以前には冷凍倉庫が建っており、発掘区はその建物部分を避けて設定した。発掘区内は一部旧建物の基礎によって遺構が破壊されている部分があったが、概ね遺構の残りは良好で、調査の結果奈良・平安時代と鎌倉時代の遺構を検出した。発掘区内の層相は発掘区西側で上からアスファルト・コンクリート舗装、盛土、作土、明茶褐色粘質土、明茶褐色弱粘質土の順で、暗褐色粘土の地山となる。遺構面は2面あり、明茶褐色粘質土上面が中世以降、地山上面が奈良・平安時代の遺構面となる。遺構検出はそれぞれの面で行なったが、明茶褐色粘質土上面では中世の粘土採掘坑の重複がはげしく、遺構の検出は困難であったため最終的には地山上面で遺構を検出した。地山上面は標高約63.1mである。以下各時代ごとに概要を記す。

奈良・平安時代の遺構 奈良・平安時代の遺構面は、後述する鎌倉時代の粘土採掘坑でかなりの部分が破壊されていたが、三条大路北側溝、十二坪南面築地跡、同雨落ち溝、掘立柱塀2条、井戸1基を検出した。

S D01 三条大路北側溝で、3箇所の南拡張区で東西約14m分検出した。検出した部分は溝の



西壁土層図 (1/100)

北側の肩から約0.4m分で、南側の肩は発掘区外にある。確認した部分で深さ約0.4mある。

S D02 十二坪南面築地の雨落ち溝で、幅約4.2m、深さ約0.3mある。発掘区の東と西にさらには続いている。溝の南側は立ち上がりがきつく、溝の肩が明瞭であるのに対し、北側は立ち上がりがなだらかで肩はあまり明瞭でない。溝は発掘区東側の所では、北側に長さ約3mほど広がる部分があり、その部分では東西4m、南北3mの範囲で奈良時代末から平安時代初頭の土器が大量にかたまって出土した。また溝は発掘区西側の所で、長さ約7mにわたって深い部分がある。この部分は幅約2.0m、深さ約0.6mで、溝底近くには焼土が薄く堆積しており、その層から和同開珎の鋳放し錢が出土した。なおこのS D01と02にはさまれた幅2.5mの所には十二坪南面築地が存在していたと考えられるが、その版築土などの痕跡は確認できなかった。

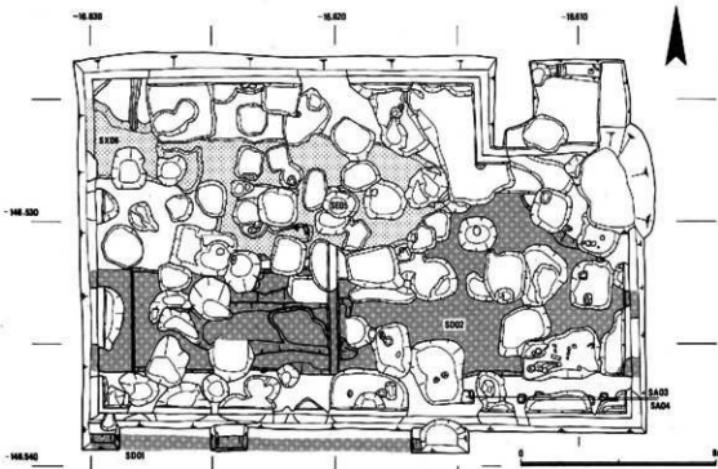
S A03 東西方向の掘立柱塗で、2間分(5.7m)を検出した。柱間は西から3.0m、2.7mで、一番東の柱穴には柱が残っていた。柱掘形の深さは0.4mある。

S A04 東西方向の掘立柱塗で、1間分(2.7m)を検出した。柱掘形の深さは0.2mある。

S E05 東西1.5m、南北1.2mの平面梢円形掘形の井戸で、井戸枠はなかった。深さは約1.8mある。遺物整理箱1箱足らずの奈良時代中頃の土器と曲物1つが出土した。曲物は底から約1.6m上の所で底を上に向けて出土した。

S X06 幅約2.5~5.0m、深さ約0.2mの東西方向に走る不整形な溝状の遺構。9世紀末から10世紀初めの土器が出土した。

鎌倉時代の遺構 粘土探査坑が約80基、中世素掘小溝が多数ある。発掘区全域に広がっている粘土探査坑は、平面形が方形または円形で、一辺または径が約1.0~3.0m、深さは約0.4~1.0mある。探査坑には底に鋤先が刺された痕跡を残すものがあり、それによると土を四角くブロック状に切り出している様子がうかがえる。坑内からは奈良時代の土器・瓦が出土したが、その内2つの探査坑からは13世紀後半の土師器皿が完形またはそれに近い形で出土した。 (中島和彦)



遺構平面図(1/200)

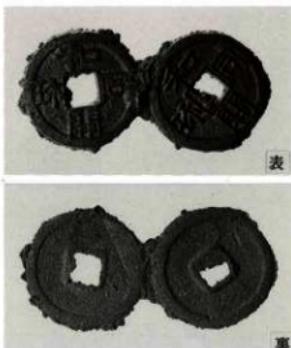
出土遺物 瓦塼類が遺物整理箱3箱、土器類が遺物整理箱16箱、錢貨、木製品などがある。

瓦塼類 軒丸瓦4点、塼6点の他、丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦にはS D02から出土した6133Dが1点、6282Bが1点、型式不明が1点と、中世粘土採掘坑から出土した平安時代以降の瓦紋が1点がある。 (山前智敬)

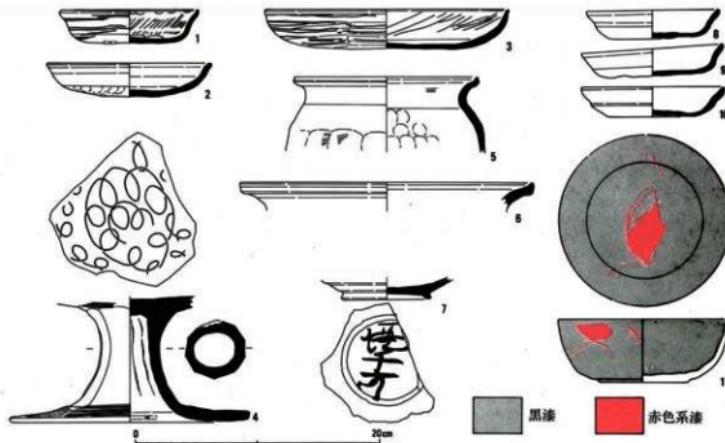
土器類 S E05から土師器皿A(1)・C(2)、皿A(3)、高杯(4)、甕(5)、須恵器杯、甕(6)が遺物整理箱1箱ほど出土した。1はa、2はa、3はc:手法で調整されている。高杯の脚部は10角形に面取りされ、脚部内面には絞り目痕跡が残る。5は「都城形」の甕である。体部外面には叩き痕跡、内面には當て具痕跡が残る。7はSX06から出土した灰釉陶器碗で、底部外面には「酒千万」と読める墨書がある。8~10は中世の粘土採掘坑から完形またはそれに近い形で出土した土師器皿で、いずれも13世紀後半のものと考えられる。 (三好美穂・中島和彦)

錢貨 SD02出土の和同開珎の鑄放し銭は2個体がつながっており、表から見て右側が直径2.53cm、外縁厚0.17cm、左側が直径2.48cm、外縁厚0.12cmある。左右いずれも「開」字は隸開だが、書体は異なる。右側の開字の外側に壇と考えられる切断痕が1カ所あり、鑄型は湯道の両側に銭を2列ずつ並べたものと推定できる。この他粘土採掘坑から元豊通寶(初鑄1078年北宋)が1点出土した。 (原田香織)

木製品 S E05から曲物が、粘土採掘坑から漆椀、漆膜、曲物破片が出土した。漆椀(11)は、口径13.5cm、器高5.15cmで、低い平高台である。縦木取りで布着せはない。下地塗りの後全体に黒漆を塗り、赤色系漆(朱色)で外面と見込み部に文様(木の葉?)を描く。 (中島和彦)



溝SD02出土と同開珎鑄放し銭



井戸SE05(1~6)、SX06(7)、粘土採掘坑(8~11)出土遺物(1/4)